

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査  
第2次調査概報

1997年3月

上市町教育委員会

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査  
第2次調査概報

1997年3月

上市町教育委員会

## 序

上市町黒川上山古墓群は、平成6年に下水道管理用道路に伴う発掘調査で12世紀末から14世紀までの中世墳丘墓群で完全な形で今に残る全国でも希な遺跡であることが判明しました。町ではその重要性から道路の方線変更を行い全面的に遺跡を保存、同年12月には上市町指定史跡として後世に残すことになりました。

上市町教育委員会ではこの遺跡を次代に残すため保存整備する予定ですが、その資料作成のための発掘調査を本年度より国庫補助を得て計画的に行うことになりました。

前回調査では遺跡全体の約1／2の調査を完了していましたが、今回は残りの部分の調査を実施し、遺跡の全体像を明確にするための発掘と測量調査をいたしました。

その結果、新たに50基を越える埋葬施設が発見されそれに伴う藏骨器をはじめとする遺物も多数発見されました。また、墓群全体のあり方からこの遺跡が氏を中心とする社会から家を中心とする社会への転換期の遺跡であることが次第に明確になってきました。今後さらに周辺の調査を行い全体像を明確にし、後世に残す貴重な遺産として保護していきたいと考えています。

調査は、平成8年の11月から12月に行いましたが、この間に掘り出された資料が平安時代から、鎌倉時代の富山県を知るよすぎとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査に、数々のご指導とご教授を頂きました、文化庁記念物課、県文化課、県埋蔵文化財センターをはじめとする皆様方に心より感謝申し上げます。

平成9年3月

上市町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、富山県中新川郡上市町黒川地内に所在する上山古墓群の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成8年11月7日から同年12月17日まで実施した。
3. 調査面積は1,500m<sup>2</sup>である。
4. 本調査は、国庫補助金、県費補助金を得て上市町教育委員会が実施した。
5. 調査事務局は、上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁記念物課、富山県教育委員会（文化課・県埋蔵文化財センター）の指導を受けた。事務及び調査担当は、生涯学習課主任高慶 孝が担当し、生涯学習課長神谷育雄が総括した。
6. 遺物の整理、本書の編集・執筆は、調査担当が行った。遺物の実測・トレースは、調査担当が中心となり、富山大学学生石井淳平・早川さやかが行った。
7. 調査期間中、文化庁記念物課調査官 坂井秀弥、富山県文化課副主幹 関 清、富山県埋蔵文化財センター所長岸本雅敏、同課長 宮田進一の各氏の視察を受け、ご指導をいただいた。また富山大学人文学部教授 宇野隆夫氏には調査期間中、現地も含めて数々のご指導、ご協力をいただいた。

珠洲焼に関しては、国立歴史民俗博物館考古研究部教授吉岡康暢氏に実測図により概観いただいた。また、石造物については、京田良志氏にご意見をいただいた。

その他調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義な指導・助言並びにご協力をいただいた。記して深甚なる謝意としたい。

静岡県磐田市教育委員会 山崎克巳、富山大学人文学部助教授 前川 要、 富山県埋蔵文化財センター主任 東藤 降、久々忠義、橋本正泰、富山県文化振興財團埋蔵文化財事務所主任 酒井重洋、立山町教育委員会社会教育課主事 三鍋秀典（順不同・敬称略）

8. 調査参加者はつぎのとおりである。

近藤美紀、河合 忍、稻石純子（以上富山大学大学院）松木 茂、小松博幸、戸籠暢宏、中野秀昭、瀧川邦彦、早川さやか（以上富山大学学生）高城富美子、高城英子、金子みつき、川上富美子、平井文子、吉田盛太郎、三輪光子、伊藤萩子、伊藤キミ子、田中好巳、田中フミ子、井原ハチエ、松本スミ子、伊藤好子（以上作業員）

石井淳平、早川さやか（整理作業員 富山大学学生）

# 目 次

序文

第3図 墓群全図

例言

第4図 遺構実測図 20~24・32・43号墓

I 遺跡の環境 ———————— 1

第5図 遺構実測図 25~31・33~36・39~42号墓及び  
47・48

第1図 地形と周辺の遺跡 ———————— 2

第6図 遺構実測図 37・38・44~47・49~60号墓及び南  
側テラス

II 調査に至る経過 ———————— 3

第7図 60号墓 五輪塔下埋葬遺構実測図

III 調査の経過と層位 ———————— 3

第8図 遺構実測図 61~67号墓

第2図 遺跡周辺図 ———————— 4

図 版

IV 調査結果 ———————— 5

1. 遺構 ———————— 5

2. 遺物 ———————— 10

V 調査の成果の整理 ———————— 13

1. 墓の分類 ———————— 13

墳丘墓の分類について ———————— 13

集石墓の分類について ———————— 14

土星上墓について ———————— 14

塔墓について ———————— 14

2. 造墓の年代と詳構成 ———————— 14

VI まとめ ———————— 16

第2表 墳丘墓・集石墓・塔墓等一覧 ———————— 17

引用・参考文献 ———————— 19

## I 遺跡の環境

黒川上山古墓群は、富山県中新川郡上市町黒川字上山に所在する（第1図・第2図・図版1）。上市町は、富山県の東南部に位置し、立山連邦に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西にのびる町である。西は県都富山市に接する。東は、標高2,998mの剣岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。

遺跡の所在地である黒川は市街地の北東にあり、上市川の支流、郷川上流左岸の標高65~70mの丘陵に占地する。この丘陵を東に迫れば、弘法大師ゆかりの地、護摩堂（ゴマンドウ）にたどり着く。ここから尾根沿いに南へ迫れば、立山室堂越（タテヤマムロドウノッコシ）に行きつく。室堂は立山信仰の拠点であり、本遺跡のバックグラウンドであり、真言宗をはじめとする、修験道の靈場である。またこのルートの谷をはさんで東側には、「地獄の針の山」と立山信仰では称される剣岳を仰ぎ見ることができる。剣岳山頂からは、9世紀のものと見られる銅製の錫杖頭と鉄劍（国指定有形文化財）が発見されており、修験道とのつながりが考えられる。本遺跡が黒川に占地したのは、偶然ではなく、こうした環境が、造墓するのにふさわしいものと考えられたからではなかろうか。

黒川にあった真言宗本覚院の寺伝によれば、本院は、享保7年に僧、長玄によって開かれた。それ以前は、花崗山真興寺（真言寺院と考えられる。）があったが富山に移転したためその跡を纏いだと言われる。真興寺は寛弘5年（1008）に真興上人によって現在の本覚院うら手の山中（字名は古寺）<sup>アカニ</sup>に開かれたものと言われている。真興上人は、寛和2年（896）に弘法大師止錫の護摩堂村弘法堂を参拝、その帰りに麓の黒川に立ち寄り、この地を八正道を宣布するにふさわしい地であるとして庵を結んだと伝えられる。これにより最盛期にはここを中心に、円念寺・淨土寺・正等寺、開谷には、源内坊・奥野坊・作内坊・好田坊などができる、信仰の中心になったと言われる。黒川から護摩堂に至る道は、一部町道として残り、それに続く旧道も確認される（発掘調査以降改修中）。この道は、遺跡の南直下を通過し護摩堂用を沢づたいに延びている。また遺跡からは護摩堂地区が見通せる位置であることも確認できた。

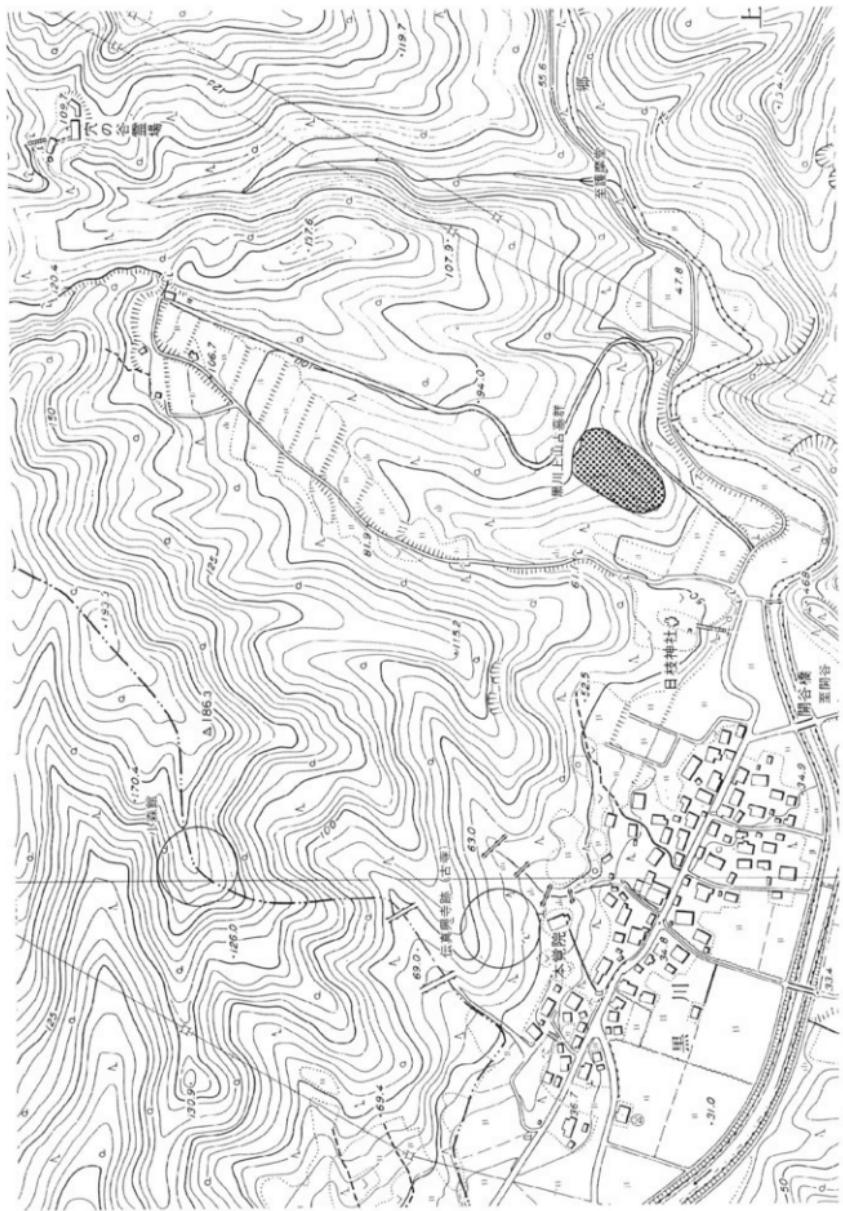
町内及び郷川、上市川沿いの古代から中世の遺跡を見ると市街地の南東に真言宗の古利大岩山日石寺（磨崖佛、京ヶ峰經塚 いづれも平安前期）、東に曹洞宗の眼目山立山寺（眼目山旧開山堂遺跡 築倉後期）などの寺院、市街地の南、立山町の日中王橋經塚・日中東經塚などの經塚、さらに北部の上市川・郷川ぞいに文献上、古代から中世に登場する堀江保・小森保もしくは堀江の莊に関連すると見られる遺跡（江上B・東江上・上梅沢町・本江馬場田・横越の各遺跡）、さらに南北朝期に堀江莊に東國から莊官として入部し在地領主化したと言われる上肥氏（源賴朝の功臣土肥実平の末裔と言われる。）をはじめとする豪族の居館跡（賓輪城跡・稻村城・郷柿津館・有金城・堀江城・小森館・堀の内城・弓庄城・柿沢城・茗荷谷山城）など数多くの遺跡が見られる。

上山古墓群が12世紀末から14世紀前半に造墓活動が見られそれ以降、造墓が途絶えることを前回調査で確認したが、南北朝期に入部した東国武士、土肥氏がこれに関与した可能性が考えられる。

上肥氏が14世紀はじめに越中に入部し勢力を拡大する中で、前記の城館を築くが、小森館・茗荷谷山城・稻村山城などは、寺院を見下ろせる場所に築かれており寺院勢力に配慮した配置をとっているように見受けられる。

土肥氏入部以前の在地勢力がどのようなものであったか、堀江莊以前のおそらくは国衙領に属していたものと思われる本地域がどのように変化していったか、あらゆる角度からの分析が必要となる。

以上のように黒川上山古墓群の周辺遺跡は、古墓群の消長に深く関わったものと考えられ、今後、文献の調査・考古学的調査を深めることにより明らかにしていきたい。



第2図 遺跡周辺図(1/5,000)

## II 調査に至る経過

上市町黒川地内では、平成5年度に農業集落排水事業の管理用道路が計画された。しかしながら当該地区には上山古墓群の存在が知られており、上市町上下水道課と上市町教育委員会、富山県教育委員会の3者により、遺跡の保護と工事計画の調整のための事前協議が行われた。当初は、道路計画が遺跡に最も影響が少ない方線で施工し、遺跡にかかる部分について発掘調査が実施された。しかし、調査が進む中で本遺跡が全国でも調査例の少ない中世墳丘墓群で墓数も40基を上回るきわめて良好な遺跡であることが明らかとなった。

これを受け上市町教育委員会は、上級機関の指導のもと、県文化財保護審議委員会・奈良大学学長水野正好氏に現地視察をお願いし、保存に関する意見をいただいた。この意見を元に、町当局と再度協議を重ね、地元黒川地区からの保存要請もあり、全面保存の方向で合意した。その後9月議会で報告、道路の方線変更に伴う補正予算も通過し保存が決定した。同地内は平成6年12月8日町指定史跡として指定され、平成7年度には公有地化も計画された。

## III 調査の経過と層序

### 第1次調査（平成6年度本調査）

平成6年5月13日から同年7月27日までの延べ72日間で実施した。調査対象は1,500m<sup>2</sup>でこのうち道路が計画された部分について遺跡の内容を確認した。

調査では、墳丘墓19基などの遺構、珠洲焼の藏骨器、土師質土器（かわらけ）などの遺物が確認された。遺構と共に発する藏骨器・土師質土器は、13世紀代のもので、この墓群の造営時期もほぼその年代に比定された。また、調査地区以外の部分においても16基以上の墳丘が視認され、全体で39基以上の墳墓が存在し、極めて良好に残存していることが明らかとなった。

### 第2次調査（平成6年度試掘調査）

平成6年9月9日から9月22日までの延べ11日間で県補助金を受けて実施した。対象は古墓群東側の山林約5,000m<sup>2</sup>で、道路方線の変更に伴う事前の試掘調査として実施した。

その結果、墳墓を新たに4基発見し、遺物も、須恵器片、縄文土器、石器など整理箱1箱分の遺物を採集した。これによりこの地区も保存することにし、道路も大きく迂回した。

### 第3次調査（平成8年度本調査）

平成8年11月7日から同年12月17日までの延べ25日間で実施した。対象は平成6年度調査地区的南西で16基以上の墳墓が視認されていた部分、約1,500m<sup>2</sup>で遺跡の内容を確認した。

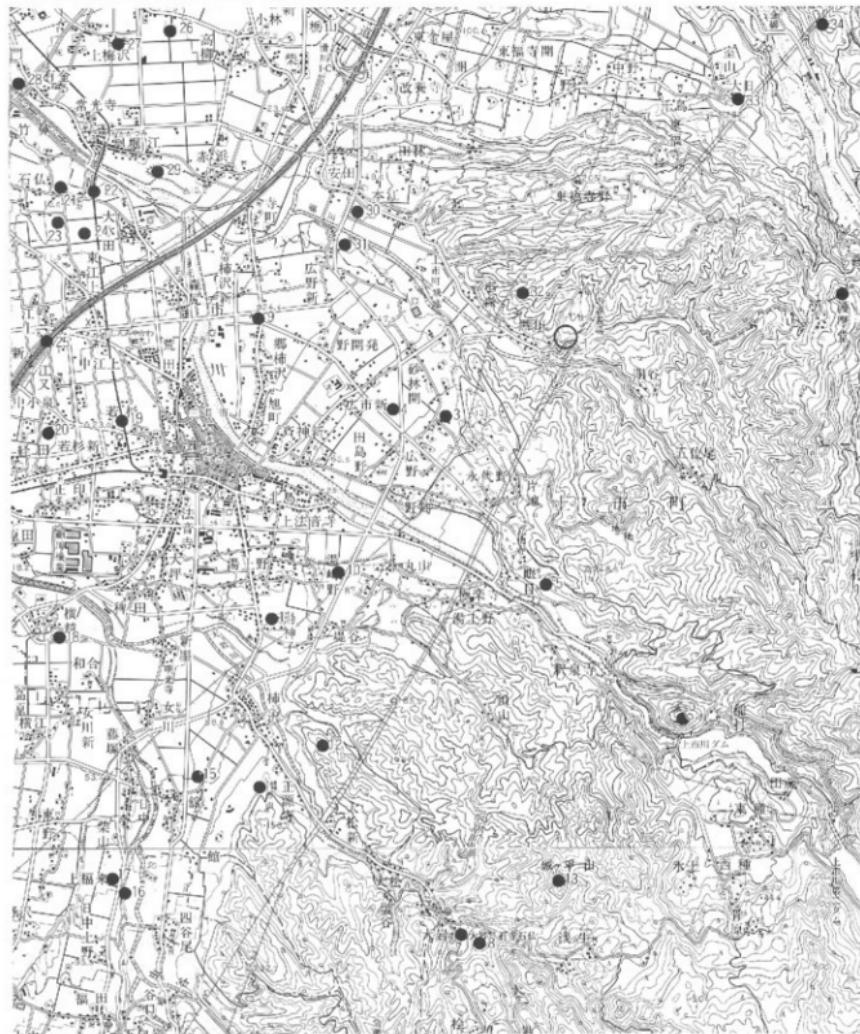
その結果、墳丘・集石・五輪塔など45カ所の埋葬施設を発見し全体で70カ所の埋葬施設を持つ墓群であることが明らかとなった。出土遺物は、珠洲焼の藏骨器のほか、輸入磁器・土師質皿、1次調査では1基しか発見されなかった五輪塔が現位置を保つもの2カ所を含めて6カ所で発見された。それらの遺物から12世紀後半ないし末から15世紀前半までの造営期間があったものと考えられる。また、墓群全体を見ると12世紀代から13世紀初頭の墳墓は尾根ラインに築かれ、それ以降の墓はそのラインに平行あるいは直角になるよう計画的に配置されていることが明確に観察された。

なお、調査は、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が行った。

### 層位

遺構は、表面の落葉、雑草、腐植土（5~10cm）を排除することで検出される。石組墓、墳丘上の配石などは一部露出しており、調査前にある程度の観察は可能である。しかしながら、大型の墳丘の周りに配されている石組み、五

輪塔などは、調査後検出される。遺構面は、黄褐色土で、地山を削って墳丘が築かれている。平成6年度調査で見られた縄文時代の遺物は、今回検出されなかった。



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

1. 黒川上古墓群
2. 製輪城跡
3. 広野D遺跡
4. 広野C遺跡
5. 眼目山旧山堂遺跡
6. 鶴村山城跡
7. 日石寺廢塔
8. 大岩京ヶ峰経塚
9. 郷柿沢館跡
10. 湯崎野西遺跡
11. 湯神子B遺跡
12. 柿沢城跡
13. 著谷山城跡
14. 郷田砦
15. 馬庄城跡
16. 日中玉橋経塚
17. 日中東経塚
18. 横越遺跡
19. 若杉神田遺跡
20. 中小泉東遺跡
21. 石仏遺跡
22. 石仏町遺跡
23. 石仏南遺跡
24. 大永田西遺跡
25. 江上B遺跡
26. 上梅沢町跡
27. 上梅沢遺跡
28. 有金城跡
29. 須江城跡
30. 本江馬場田遺跡
31. 羅山砦跡
32. 小森館跡
33. 堀の内城跡
34. 水尾南城跡

## IV 調査結果

### 1. 遺構（第3～8図、図版8～16）

調査により検出した遺構は、12世紀後半から15世紀はじめの平安時代末・鎌倉時代・南北朝期・室町時代に属するものである。1次調査で見られた绳文時代の遺構は今回の調査区からは検出されない。

遺構が検出されるのは標高約67mから64mの舌状の丘陵端部の斜面上である。今回の調査区は、墓群のほぼ中央部、標高67mの等高線上に設けられた約1mの段差の南側である。遺構全体は、野生動植物の影響で表面が若干削られた部分があるものの、ほとんど手付かずのまま残存しており1次調査同様、極めて良好な残存状況を示している。

検出した遺構は、墳丘墓（石組みを持つものとないものがあるが墳丘を持つものをこの名称で呼ぶ。）22基、集石墓10基、土壘状の土盛りの上に石組墓を築くものの8基、集石造構1カ所、五輪塔を墓標とするもの（墳丘・石組みはない）2カ所で、土壙墓らしき遺構は検出されなかった。葬法もほとんど全てが火葬と考えられ、土葬は本調査区では確認されなかった。

**墳丘墓**（第3～6・8図、図版9～13・15）墳丘墓には平面形が方形のもの（17基）長方形のもの（2基）で1次調査で見られた楕円や不正円のものは見あたらない。墳丘墓のすべてに何らかの石組みが施されており、平面形同様の方形を基本とする造営が行われている。また、墳丘と墳丘をつなぐようにあるいは、円形の集石を方形に取り囲むように築かれた土壘状の高まりが巡らされる部分があり、その上に石組みを行い埋葬されるもの8基もある。

**20号墓**（第4図）X79185～79188、Y21375～21377に位置する。この墓群の中央部西側にある。平面形は方形で、1辺が約3m、墳頂の高さは、約50cmと比較的小さな規模のものである。墳丘裾に縁石の名残と考えられる礎が残っている。墳頂部に焼骨片が観察されるが遺物は伴ってはいない。主軸は墳頂でN50°Wを計り1・8・16・17号墓と軸方向が酷似し、同一の群と考えられる。

**25号墓から29号墓** 丘陵の尾根線上に連続して築かれたもので、同族墓あるいは家族墓としてとらえられる。

**25号墓・26号墓・27号墓**（第5図、図版9・10）X79178～79182、Y21380～21383に位置する。同一軸線上の一帯北側から順に番号を付した。この3基は、同一区画に盛土されているものと見られ、隣り合う部分にわずかな溝や縁石を行い区画する。平面形は、墳丘裾で、3m×2.34m、3m×2.24m、2.58m×2.40mの方形を呈し、規模は、墳頂で25号墓が1.62m×1.42m、26号墓が1.62m×1.13m、27号墓が1.52m×1.44mとほぼ方形に近い。高さは標高で約67.88m前後でほぼ一定である。墳丘裾からは43cm、47cm、46cmと比較的低いようだが、43号墓と64号墓の間の墓道と考えられる部分からは、比高差約3mでかなり高く感じられる。墳丘は、土を盛り上げた土壠頭のようであるが、握り拳から人頭大までの石をかなり多く中に詰めて構築されており、しっかりと構築がなされている。墳頂に主体部は検出されなかった。一部、基底部まで掘削したところ、炭化物と灰、被熱した漆を検出したが、埋葬骨は確認できなかった。造墓の順番は、26・27・25号墓の順と推定される。主軸はいずれもほぼN80°Eを計り、墓の正面は、墳丘東側と見られる。

**28号墓・29号墓**（第5図、図版9・10）X79173～79177、Y21381～21385に位置する。先の25～27号墓と同一軸線上にあるが、27号墓との間にやや深く溝が設けてあり、区画を意識したものと考えた。この意味でこの墓は双墓（夫婦墓？）の可能性がある。平面形は、墳丘裾で、28号墓が2.74m×1.84m、29号墓が3.64m×2.76mの長方形を呈し、規模は、墳頂でそれぞれ1.78m×1.4m、1.02m×0.78mを計る。両墳丘間の溝は25～27号墓のそれと比べるとやや深いが、明確な区画性はない。墳頂部に石組みを施すが、主体部は検出されない。盛り土は、25～27号墓と同様、盛り

土に礫を混入させているが、さらに礫の割合が高く、28号墓などは積み石墓と言ってもよく、調査前の状態でも、墳丘に礫が観察された。墓底部からは、炭化物と灰、被熱した礫を検出したが、埋葬骨は確認できなかった。検出状況から、28、29号墓の順と考えた。墳頂での標高は約67.88m前後で、25~29号墓まではほぼ一定である。主軸方向はN 88°-E, N 87°-Eで、墓の正面も東側と見られ、25~27号墓とにしている。この2基の西側に、約1mの比高差で低く、造墓区画と考えられる47がある。集石墓と見られる若干の石組みが見られるが、主要な部分をはずして、遠慮がちにつくられている。

**30号墓～33号墓**（第3・4・5図、図版9・10）X 79173～79188, Y 21381～21387に位置する。25～28号墓までの墓列の東側直下に比高差約60cmに築かれている墓列である。30号墓が29号墓からこの墓列に降りてくる斜面上に築かれている感があるが、他の31・33号墓は、25～29号墓下の段上の同一平面に築かれている。32号墓は、31号墓の北側に独立して築かれるが、同一の縦線上にあり、また、25号墓から上星状の高まりが作りつけられており、一体感が感じられる。平面形は方形で、30・33が盛り土がなく、それぞれ1.5m×1.5m, 2.14m×2.12mの規模をもつ。31号墓は、墳丘墓で、裾で2.88m×2.6m、墳頂部で1.52m×1.5mを計る。ほぼ中央に深さ28cmの穴を穿ち、八尾焼きを蔵骨器とした主体部を設けている。遺物から13世紀末ないし14世紀初頭の墓と推定される。32号墓は、墳丘墓で規模は、裾で4.9m×4.6m、墳頂で3.24m×3.2m、裾からの高さ0.39mの方形のものである。これもまた石組みが施されている。

**34号墓～42号墓**（第3・5・6図、図版9・10・16）X 79169～79183, Y 21387～21394までの範囲に位置する。48号の円形の集石を取り囲み、44号墓の東辺に接する上星上の高まりに築かれている石組みの墓である。上星の上に構築することで、盛り土を持つものと同様な効果を求めたものと考えられた。今回調査では8カ所の埋葬施設しか確認していないが、この土星上にはまだ埋葬施設があるものと考えられる。以下埋葬施設ごとに概要を述べる。

**34号墓**（第5図、図版9・10）X 79176～79178, Y 21387～21388に位置する。集石の平面形は1.36m×0.89mの長方形である。主軸はN 89°-Wを計る。48の円形集石の西にあり、25から29号墓の段、31・33号の段とこの34号墓のある段は、南北にはほぼ平行に階段状に構築されており、48から見ると祭壇のような景観である。集石上に地輪とみられる一辺約15cm程度の砂岩質の石が確認される。

**35号墓**（第5図、図版9・10）X 79175～79176, Y 21389～21391に位置する。34号墓とはほぼ直角になる位置で48号の南側に位置する。規模は、2m×1.46mで、軸方向は、N 5°-Wである。平面形は、長方形で、縁石が丁寧に巡らされている。

### 36号墓（第5図、図版9・10・16）

X 79173～79175, Y 21392～21393に位置する。35号墓の南東にあり、墓域南東から延びる墓道に面して占地する。規模は、1.58m×1.32で平面形は方形である。軸方向は、N 79°-Eである。

墓の北側に珠洲焼きの蔵骨器を検出した。上部が一部分欠落しているが、ほぼ原型をとどめている。木根により上部の蓋が失われており焼骨は器の2／3程度を残すのみである。遺物から13世紀後半の墓と考えた。

**37号墓**（第6図、図版10）X 79171～79173, Y 21392～21394に位置する。36号墓の南隣にあり、44号墓と西で接する。規模は、1.64m×1.36mで平面形は長方形である。軸方向は、N 74°-Eで36号墓に並ぶ。

**38号墓**（第6図、図版10）X 79169～79171, Y 21393～21395に位置する。37号墓の南隣にあり、44号墓と西で接する。規模は、1.64m×1.48mで平面形は方形である。軸方向は、N 76°-Eで35・36号墓に並ぶ。土界はここで途切れ、墓の南側下に石組みが設けられている。38号墓の追善施設ではないかと考える。37・38号墓は、44号墓と西で接するが、切り合いから、これらの墓の乗る土壘は44号墓の後に築かれており、44号墓の東側墳丘裾は、この土壘により覆われている。

**39号墓**（第5図、図版9）X 79179～79180, Y 21392～21393に位置する。36号墓の北にあり、48号集石を取り囲む

土壘端に造営されている。この墓の東に墓道が走り、土壘の開口部が36号墓との間にあり、48号集石への入り口となっている。規模は、 $1.30m \times 1.08m$ で平面形は方形で、比較的丁寧な石組みが施されている。軸方向は、N $86^{\circ}-E$ で上墨に平行である。墓道との比高差は、約1mである。

**40号墓**（第5図、図版9）X79181～79183、Y21391～21392に位置する。48号集石の北東で、43号墓の南の土壘上にある。上墨はここで南に屈曲する。規模は、 $1.30m \times 1.08m$ で平面形は方形で、39号墓と同規模である。輪方向はN $4^{\circ}-W$ で、39号墓と直角の位置で墓の正面は、北側と考えた。石組みは、方形の縁石を残すが、39号墓より約50cmほど高い位置にあり裾に若干の石列を残す。

**41号墓**（第5図、図版9）X79181～79183、Y21388～21389に位置する。48号集石の北西にあり、40号墓から、約5m西にある。石組みが施され、規模は $0.86m \times 0.7m$ で平面形は方形であるが、軸方向が、N $39^{\circ}-W$ と上墨と平行ではなく、また中心を外れて築造されている。土壘上の他の墓とは異質であり、やや後出のものと考える。

**42号墓**（第5図、図版16）X79182～79183、Y21387～21388に位置する。上墨をはずれた、32号墓と41号墓のやや低い平坦面に築かれている。規模は、 $0.88m \times 0.82m$ で平面形は方形で石組みの跡をのこす。ほぼ中央に徑約30cmの穴に蔵骨器を埋納する。蔵骨器の蓋はなく焼骨に土が混入している。遺物から13世紀末の築造と考える。

**43号墓～46号墓**（第3・4・6図、図版9・10・11・15）X79165～79188、Y21376～21393まで広い範囲に範囲に分布する。これは、43号墓が離れて造営されているためであるが、墓の形状や、輪方向からまとまりを見いだした。

**43号墓**（第4図、図版15）X79184～79188、Y21389～21394に位置する。方形の墳丘墓で48号集石を中心とする墓群の北に作られており、独立した感がある。しかし、全体を見ると後述する44号墓～46号墓に、主軸が一致しておりこれららの墓とのまとまりが考えられる。規模は、裾で $4.72m \times 4.14m$ 、墳頂で $2.38m \times 1.82m$ 、裾からの高さ0.8mで、墳頂の狭いものである。東側に墓道が走り、裾の一部分が削られた感がある。当墓群成立初期のものと考える。なお主軸はN $13^{\circ}-W$ で、墓の正面は、北側と考えた。

**44号墓**（第6図、図版10・11）X79168～79173、Y21388～21393に位置する。土壘上の集石墓37・38の西に近接して存立し、東側の裾は七墨により完全に覆われている。規模は、裾で $4.94m \times 5.1m$ （復元値）、墳頂で $3.2m \times 3.2m$ 、裾からの高さ0.45mの方形の墳丘墓である。墳頂部が広く標高66.3mではほぼ一定の平坦面を作り出している。そのほぼ中央に $1.25m \times 1.34m$ の方形の集石が見られる。なお主軸は、N $10^{\circ}-W$ で、墓の正面は、南側と考えた。

**45号墓**（第6図、図版10・11）X79164～79171、Y21388～21393に位置する。44号墓の西側に大きく、ひときわ高く作られている。平面形は方形で、規模は、裾で $4.72m \times 4.14m$ 、墳頂で $2.38m \times 1.82m$ 、裾からの高さ1.1mと他を圧倒している。主軸方向は、N $15^{\circ}-W$ で、墓の正面は、南側と考えた。墳頂部に若干の石組みが見られるが、今回調査した墳丘墓の中では比較的少ない。この墓と25～29号墓を、つなぐ軸線上に主軸はややずれるが、本墓群最高所の1号墓がある。墓群全体の地形を観察すると、この軸に木丘陵の尾根があることがわかる。45号墓は、その尾根筋の南端に築かれしており、その存在は川の流れる谷からも見通せる。墳頂上に主体部は検出されないが、中央をやや南にはずした基底部上に蔵骨器を埋納している。蔵骨器は、白磁の四耳壺を使い壺口縁を打ち欠いて、その上に土師質の皿2枚を重ね合わせて蓋としている。基底部までは、墳頂から1.12mで底面に焦土と被熱した礫、灰などが観察される。造営は、出土した蔵骨器・土師質皿から12世紀後半と考えられ、本墓群のもっとも早い時期の墓の一つであることが確認された。

**49・50号墓**（第3・6図）X79169～79173、Y21397～21400に位置する。同一の長方形の墳丘上に築かれており、37・38号墓がのる土壘の西に位置し、規模は、墳丘裾が、 $5.18m \times 2.40m$ 、墳頂が49号墓が、 $1.12m \times 1.1m$ 、50号墓が、 $1.04m \times 1m$ で裾からの高さはともに0.31mと同一である。墳頂の平面形はともに方形である。軸方向はそれぞれN $85^{\circ}-E$ ・N $86^{\circ}-E$ と一定である。規模、輪方向などから双墓の可能性が高い。37・38号墓からの比高差は、約1.1

m低くさらに約1m下に墓道が走る。墳丘の南側には1.1m×1.75mの縁石があり、祭儀空間と考える。

**51号墓**（第3・6図、図版12）X79164～79167, Y21390～21393に位置する。44号墓の南側にあり、墓域最南端にあり約3.27mに丘陵を一部分削って作られたテラスがある。塔墓である60号墓がその直下に造営されている。

規模は墳丘裾が、3m×2.46m、墳頂は、1.62m×1.54mで高さは0.45mを計る。平面形は方形である。主軸はN4°～Wで44号墓を意識しているようである。テラスと墳頂の比高差は約2.7mで、下から見上げるとかなり大きく感じる。

**55号墓**（第3・6図、図版12）X79157～79159, Y21381～21383に位置する。墓群南西端にあり、南側直下にテラスを見下ろす。墳丘の跡はないが丘陵端の崖を裾として構築されており谷から見て墳丘状を呈することを意識した占地が行われているところから墳丘墓として取り扱う。規模は2.12m×1.8m、高さはテラスから1.72mでかなりの高さを感じる。平面形は方形で、主軸はN1°～Eを計る。墓中央に径約34cm深さ30cmの穴が穿たれ、珠洲焼きを藏骨器とした埋葬が行われている。残念ながら木板により藏骨器は破壊され、焼骨は散乱しており回収できなかったが、本体の90%は残っており蓋として利用されたすり鉢片も回収できた。この遺物から珠洲IV期初頭（13世紀末～14世紀初頭）のもので造営もその時期に比定されるものと考えた。

**61～64号墓**（第3・8図、図版10）X79180～79196, Y21396～21403までの範囲に位置する。墓道の東側にある小尾根上に北から南に配列された一群である。

**61号墓**（第8図、図版10）X79194～79196, Y21396～21399に位置する。墓道を挟んで9号墓の西に築かれている。規模は墳丘裾が、3.26m×3.04m、墳頂は、1.8m×1.56mで高さは0.48を計る。平面形は墳頂が方形である。主軸はN89°～Eである。石組みは墳頂部分に石組が施されている。

**62号墓**（第8図、図版10）X79192～79194, Y21396～21319に位置する。61号墓の南隣にあり石組み以外に明確な掘込みなど区画性がないことから、61号墓と双墓になるものと考える。規模は、墳丘裾が、3.32m×2.64m、墳頂は、1.48m×1.3mで高さは0.3mを計る。平面形は墳頂が方形である。主軸はN79°～Eで、61号墓と似かよっている。また、石組みも61号墓同様に墳頂のみに施されており類似性を感じる。

**63号墓**（第8図、図版10）X79186～79191, Y21398～21400に位置する。43号墓の西に墓道を挟んで古地する。墳丘の北東が1／3程度が後世の擾乱により失われているが、規模は墳丘裾が、4.74m×4.68m、墳頂は、2.58m×1.84mで高さは1.17m、平面形は方形と復元できる。主軸はN70°～Eである。規模から43号墓との類似性を感じるが、石組みが頭者でないこと、軸方向が1次調査の1号墓に近いことなどからこの墓群の初期の頃の造営と考える。

**64号墓**（第8図、図版15）X79180～79184, Y21400～21403に位置する。63号墓の南、39・40号墓の乗る土壇の東側に墓道を挟んで古地する。規模は墳丘裾が、3.74m×3.28m、墳頂は、1.72m×0.98mで高さは0.58mを計る。平面形は墳丘裾が方形で墳頂が長方形である。主軸はN85°～Eである。墓の正面は西側で、墓道に面している。裾のさらに外側には、5.03m×6.1mの方形の石列が認められる。

**65～67号墓**（第3・8図、図版13）X79173～79176, Y21402～21407までの範囲に位置する。墓域南東隅から北西に入り込む墓道の右側に平行に並ぶ墓群である。墳丘は、この位置に土壘上に積まれた盛り上を利用しており裾を明確にする意識はないものと考えた。いずれの墓も正面は、北東側と考えた。

**65号墓**（第8図、図版13）X79175～79176, Y21402～21403に位置する。墓道を隔てて49号墓の北東にある。規模は墳頂で1.49m×1.17mで土壘裾からの高さは、約0.2mと低いが、墓道からは約0.7mと高い。平面形は墳頂が長方形で石組みが施されている。主軸はN36°～Eである。

**66号墓**（第8図、図版13）X79174～79175, Y21404～21406に位置する。65号墓の南東隣にあり規模は墳頂で1.52m×1.04mで土壘裾からの高さは、約0.2mと低いが、墓道からは約1.2mと高い。平面形が長方形で石組みなどの特徴は65号墓に似る。

**67号墓**（第8図、図版13）X79173～79174、Y21406～21407に位置する。66号墓の南東隣にあり規模は墳頂で1.10m×1.06mで土基裾からの高さは、約0.2mと低いが、墓道からは約1.4mと高い。平面形は方形で他の2例と異なるが石組みなどの特徴は65・66号墓に似る。

**集石墓**（第3・4・6図、図版12）集石墓は10基を確認した。いずれも平坦面に敷石したもので、石だけを積み上げて構築されたものは検出されなかった。以下、墓ごとに詳細を述べる。

**21・22号墓**（第4図）X79182～79185、Y21372～21378の範囲に位置する。雖然と敷石が密集するばかりに見えるが、人頭大の石が縁石として方形に組まれていることから埋葬施設と確認できた。20号墓の南西に2基並んで構築されている。規模は21号墓が0.98m×0.84m、22号墓が1m×0.84m、主軸方向もそれぞれN34°～E、N31°～Eとほぼ同一方向であり、双墓と考えられる。

**23・24号墓**（第4図、図版12）X79181～79184、Y21376～21379の範囲に位置する。25号墓・21・22号墓の間に位置し、軸方向から、これもまた双墓と考えれる。規模は23号墓が1.1m×1.8m、24号墓が2.58m×1.68m、主軸方向もそれぞれN89°～W、N90°～Wとほぼ同一方向である。やや、25号墓が大きく、両者の関係が夫婦墓的なものかもしれない。

**52～54号墓**（第3・6図、図版12）X79162～79168、Y21380～21389の範囲に位置する。墳丘墓である45号墓の周辺に築かれたものである。

**52号墓**（第6図）X79166～79168、Y21387～21389に位置する。45号墓の南東裾に築かれており、規模は1.64m×1.35m、主軸方向はN47°～Wで、ほぼ方形の縁石が施されているが、石組みはそれほど顕著ではない。

**53号墓**（第6図、図版12）X79162～79164、Y21383～21384に位置する。45号墓の南西裾に54号墓と並んで築かれている。規模は1.54m×1.26m、主軸方向はN40°～Eで、ほぼ方形に近い。54号墓と双墓になる可能性がある。

**54号墓**（第6図、図版12）X79163～79165、Y21380～21382に位置する。53号墓の北西に並んで築かれており、双墓の可能性がある。規模は2.26m×1.58m、主軸方向はN39°～Eで、平面形は長方形である。

**57～59号墓**（第6図）X79165～79169、Y21372～21375の範囲に位置する。46号墓・47号墓区画の西側の標高65.3m前後の狭隘な平坦面に築かれており規模もかなり小さいものである。いずれの墓も石組みは顕著ではない。規模は、57号墓が1.02m×1m、58号墓が0.92m×0.86m、59号墓が0.9m×0.48m、軸方向は、それぞれ N48°～E、N43°～E、N78°～Eと同一性が必ずしも顕著でない。しかしながら、集石の組み方や狭い平坦面を巧みに利用した造墓がなされており一群として取り扱いたい。

### 塔 墓（第3・6図、図版12・14）

石組み及び墳丘もなく、五輪塔など石造物のみで埋葬されたものであり、第1次調査では検出されなかった墓である。五輪塔の各部位は墓域南端のテラス上で散見されるが、このテラス上で1基、墓域丘陵上の中西隅で1基の計2基が検出された。しかしながら、丘陵上から転げ落ちたと見られるものもあり墳丘や、集石の上に五輪塔が造立したものもあった可能性がある。以下その2例について述べる。

**56号墓**（第6図、図版12）X79163、Y21377に位置する。台座、地輪が現位置を保ち傍らに水輪が検出された。台座は、45cm角で地輪は38cm角のものである。台座下は、未調査である。

**60号墓**（第6・7図、図版14）X79160～79163、Y21390～21395に位置する。左右一対の双墓で周辺3.34m×2.78mの範囲に縁石が巡らされていたものと思われる。台座は、左右とも22cm×22cmで、約30cmの間隔で並べられている。左側の正面には、ほとんど造作のない切石がおかれる。この台座を取り除くとその下に60cm×60cmの台座2個を半切

して台座をおくための礎石として使用している。これも取り除くと砂層となり、左側に珠洲焼きを藏骨器とした主体部が検出される。この砂層を取り除くと、砂礫を一面に敷き詰め基底部としている。右側の台座下には主体部ではなくただ砂礫を敷き詰めるのみである。出土遺物は、この藏骨器と礎石とした台座の間から出土した土師質の皿がある。台座・珠洲焼き瓶・土師質皿の年代から、14世紀末ないし15世紀初頭の埋葬と考えた。埋葬が左側のみである点から、右側のものは参り墓ともとれるが、立地から正面は南側と考えられ、後に埋葬施設として利用する意図があったものかもしれない。

**造墓区画・円形集石**（第3・5図、図版9・12・15）特殊な造構として47号の造墓区画と48号の円形集石がある。いずれも埋葬施設を持たず、墓群の中で特殊な造構といえる。

**47号造墓区画**（第5図、図版12）X79169～79177、Y21373～21380に位置する。盛り土下と言うよりは、丘陵の一部を削りだして作られた平坦面である。規模は幅で7.94m×5.96m、平坦面上場で6.54m×4.52mとなり広い。28・29号墓の西にあり46号墓とはほぼ同一の軸線上に占地する。丘陵の斜面となる東側を除き周囲に溝を持ち、この一角を区画している。標高は、約67mで一定で46号墓との比高差は約60cmである。北側に集石、東側縁辺に石列が残るが、埋葬施設とはしておらず、区画だけが残っている。この付近の墳丘墓は、当初このような区画を設け、計画的に順次構築されたものと見られる。また、これだけ広い閑休地が残されたままで、他の狭隘な場所に埋葬施設が集まるところから、この区画にはある程度の地位の者が埋葬されるべき地として残されたものと考えられ本墓群を考える上で、重要な造構といえる。

**48号円形集石**（第5図、図版15）X79177～79180、Y21389～21391に位置する。34・35・39～41号墓が乗る土壘に囲まれた中央の窪地に作られている。集石は、長径2.5m、短径2.12mのやや不整形の円で人頭大の石によって形作られている。東側に墓道があり、それに面する部分の上部が途切れており、この集石への入り口となっている。この入り口から西側を見ると25～34号墓までの墓群があたかも祭壇のように配列されていることが解る。集石の約1/2を取り払うと径約1.6m深さ約60cmの掘り込みが検出できたが、内容物はなく性格については不明である。しかしながらその立地から地上に墳墓堂あるいは石塔などが建立されていた可能性を考えられ、本墓群の性格を考える上で重要な造構といえる。

## 2. 遺物（図版2～6、17～21）

出土遺物は、白磁・土師質の皿（かわらけ）、珠洲焼の壺・瓶・擂鉢・鉢、五輪塔の各部位などが出土した。1次調査で目に付いた縄文土器は1点も出土していない。出土遺物のはほとんどは墳丘墓に伴う出土品で、残存状況も比較的によいものが多い。以下図版ごとにその特徴を述べる。

**白磁・土師質の皿（かわらけ）**（図版2・3・17・19）図版2の1～3は、いずれも45号墓からの出土遺物で藏骨器あるいはその蓋として用いられていた物である。3の白磁の四耳壺に土師質の皿1・2が2枚が重ね合わせて被せられていた。1・2は口径がそれぞれ14.4cmと14cmのいわゆる非ロクロ系の土師質の皿である。低径は1が、9.5cm、2が9cmとやや1が大きく出土した際も1が上に覆い被さっていた。両者とも丸みを持った底部からやや立ち上がる口縁部に2段のヨコナデが施されたものある。全体にやや厚手で口唇部に丁寧な面取りが行われている。底面に調整のための指痕痕をとどめている。色調は、黄褐色を呈する。全体の特徴から、12世紀後半の遺物と考えるが、北陸においてこの時期の土師質の皿は開発領主クラスのごく限られた遺跡からの出土例しかなく、京都系のものと酷似する。中世の墓群からの出土例であることも含めて興味深い。3は、白磁の四耳壺である。内部に焼骨がいっぱいに納

められていた。頸部・口縁部を打ち欠いて藏骨器として使用している。器高は残存部で23.4cm（推定器高約25cm）口径約12cm、底部高台径は8cmである。器形は、幅広な大づくりな耳を持ち、その上下に横走する段を有する物で、胴部はなで肩よりさらに丸みを帯びている。高台は浅く底部・高台外面の境が不明瞭である。胴部は、ケズリ渦巻模様を残しやや角張った印象を与える。胎土は灰白色で粉っぽい感じで粗く、釉は薄く、黄味がかった乳白色を呈する。以上の特徴から、この四耳壺も12世紀後半に流通した物と考えられ、七師質の壺の年代観に一致する。このことから、45号墓は12世紀後半の造営と考えられ、本墓群中もっとも古い墓の一つといえる。

図版3の4～6は、60号墓の五輪塔台座横から出土した。いずれも口径8cmの上師質の壺である。非クロ系で、底面がまるく、口縁端部が丸く収まる。色調は乳白色を呈し、ほぼ同じ作りのものである。6に煤が付着しており光明眞として使用されたものと見られる。15世紀前半のものと考えた。

**珠洲焼**（図版2～5・17・18・20・21）図版2の4・5は55号墓から、6は42号墓から出土した。4は、擂鉢である。底部が失われており、口縁も全体の1／2を残すのみである。内面に櫛齒具を使用したオロシ目が見られるが、長さは一定ではない。口縁端部が、外反し面を作る。器体は直線的に立ち上がり、口縁でやや外反する。珠洲焼の復元のⅣ期初頭の特徴を持つ。復元口径約30cm、器高約12cmの物と考える。5は、壺である。木根による攪乱で破損した状態で出土したため、焼骨は残っていなかった。しかし、蓋は復元ではほぼ全体が残っている。口径18cm、器高36.9cm、胴径30.3cm、底部径10.2cmのものである。やや肩のはった倒卵形の器体に広口の口縁をつけた物で胎土は緻密である。焼成は良好であるが、一部に融着した粘土が見られる。器面底部を除いてほぼ全体にやや右肩下がりの叩き目が施されている。叩き目は溝の深い原体を強く叩きしめ、反時計回りに1列おきにつけられている。頭部のやや下に竹管による刻文が等間隔に4カ所施されており、さらにその斜め右下に馬蹄形の文とも粘土帶を取り付けた跡ともされるものが、やはり4カ所見受けられる。内面には全体の4／5まで1列おきに当て具旗が見られ、内底面に櫛歯ナデ旗が残っている。器面全体は、灰褐色を呈する。頸部は外反して立ち上がり、口縁部は面を持ってやや丸くひらく。13世紀末ないし14世紀初頭の珠洲Ⅳ期のものと考えた。

6は、42号墓から出土した遺物である。完全な形で主体部から出土した。内部には、焼骨が全体の約2／3納められているが、蓋がなく上がかなりの量含まれる。色調は、口径10.8cm、器高19cm、胴径18.6cm、底径9.3cmの小型の壺である。器形は口縁が外反し、怒り肩のまま底部にすぼまる。器体頭部に櫛齒状工具による5単位の弧文、上胴部に同一工具を用いた緩やかな波状文が施されている。口縁部は、くの字状に外反し手立ち上がり端部に平面を作り出す。口縁端部は、非常に鋭く整形され器形全体の印象を引き締めている。灰褐色を呈し成形、焼成とも良好な製品である。珠洲Ⅲ期後半（13世紀後半から末）の物と考える。図版3の1は、56号墓主体部から出土した。藏骨器とした使用された壺で、内部に1／2程度焼骨が納められていた。蓋は、木根により失われている。口径15.5cm、器高34.5cm、胴径28.5cm、底径9cmのものである。この壺の最大の特徴は、器面全体に施された装飾である。口縁内外面には、櫛齒状工具による波状文、頭部から胴上部は、範などを用いた波目の模様を8条その下に1条「し」の字状の模様を連続させたものを横走させ、胴部には、櫛齒状工具を波状に7条横走させて施文している。底部には、右下がりの叩き目が残っている。内面全体に当て具旗を残すことから、器面全体を一度叩き締めその後、スリ消してこのような文様を施文したものと考える。このような文様の装飾壺は初例と考える。器形は、やや肩をはった上胴部から底部がすぼまる倒卵形の器体にやや小さい口縁をつけており、頭部から口縁にかけて外反する。全体の特徴から珠洲Ⅲ期の中頃、13世紀後半のものと考えるが、器形からもう少し古い物かもしれない。3は、五輪塔の立つ60号墓から出土した。丸胴に膨らむ体部に外反気味の玉ぶちの口縁をついたもので、全体の印象は安定感がある。口径10.3cm、器高23.5cm、胴径21.4cm、底径10.8cmの小型のもので、胎土はやや粗いが、焼成は良好で全体に灰褐色を呈する。珠洲Ⅴ期のものと

考るが玉ぶち状の高唇部から他の焼き物の影響が考えられる。11・12・図版5の1～6・10～12は、34号墓周辺の土壇上で出土した。11は口縁の破片である。くの字状に外反するもので端部外面が外へ張り出している。12は口径の小さい壺の口縁である。口縁端部に櫛歯状工具による波状文が施されている。図版5の1～6・10～12は、継続状の叩き目が残る破片で胎土・調整などから同一個体と考える。これらは珠洲Ⅲ期に位置づけられるものと考える。図版3の7・8・図版4の7～9は44・38号墓周辺で採集された擂鉢・鉢・壺などである。図版3の7(図版4の7・8は鉢である。いずれも小ぶりで、底部から口縁端部にかけてやや内湾しつつ立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びているものの、面を取る意図が感じられる。静止糸切り根を外底面に残すが、一部ナデによりすり消されている。珠洲の編年のⅢ期の物と考えられる。図版4の8は、小型の壺である。やや肩の張った器體を持つものでこれもⅢ期に比定したい。図版3の9・10は、擂鉢である。口縁部がやや肥厚し、端部に面を取る。内面にオロシ目をとめており、前記の鉢類よりやや古手のものと考える。図版4の1は67号墓付近で採集した。底部から、口縁にかけて膨らみを持って立ち上がり、口縁部がやや外反する。端部は丸みを帯びるが、面をとる意識が明瞭である。内面にやや目の粗い櫛歯具を用いたオロシ目が、2条残る。珠洲Ⅱ期のものと考える。図版4の2～6は54号墓周辺の遺物である。2の擂鉢、5・6の叩き目の特徴から珠洲Ⅲ期のものと考えた。

**八尾焼** (図版2・18) 図版3の2は、八尾焼きである。31号墓主体部より出土したもので、今のところ本墓群で唯一出土した物である。器形は壺で焼成は悪く、全体に焼ききぐれの状態でありまた口縁が失われている。外面全体に茶褐色の釉が施されている。器形は、肩の張った上部から底部にすぼまる器體に外反する口縁を取り付けたもので、腹部に接合痕と思われる1条の段が残っている。13世紀末なし14世紀初頭の製品と考えた。

**石造物** (図版6・7・18・19) 出土した石造物は板碑が1点だけで、その他はほとんどが五輪塔で占められている。出土場所は、墓群南端の丘陵端部もしくは丘陵の一部を削り取って作られたテラス部分である。出土点数は、空風輪1・火輪4・水輪3・地輪2・台座6・板碑1の計17点である。出土状態は、元位置を保つ物が56号墓の地輪(図版12の4)と60号墓の台座(図版14の1～3)で他はテラス上部の斜面などにこぼれ落ちた状態で出土している。形状から見た年代は、いずれも14世紀末から15世紀にかけてのものと見られ、木墓群の最終段階の造立と考えられる。本書では56号墓のものを除いて図示した。図版6の1は、空風輪である。空・風一体型の成形で、空輪部が大きく、風輪部が小さく薄い。高さ24cm、最大径は、空輪部14.4cm、風輪部13.6cmである。石質は硬質砂岩でやや粗い成形である。図版6の2から5は、火輪である。石質はいずれも凝灰岩と考える。大きさは、高さ16cm～18cm、幅24cm～26cmの2・5、高さ28cm～25.6cm、幅35.2cm～33.6cmの3・4がある。前者は、峰の低い15世紀代、後者は峰の高い14世紀代のものと考えられやや大型の五輪塔が想起される。図版6の6・7、図版7の1は水輪である。このうち図版7の1は、下部が失われており詳細は不明である。図版6の6・7は、いずれも中央に梵字が刻まれる。彫りは深いが、粗緻なものとはいいがたい。字の形状は若干違うが、おそらく同一のもので「曼」を刻したものである。大きさは6が高さ16cm、最大径25.6cm、7が高さ20.4cm、最大径27.6cmで6が上下の平坦面がややくびれ、7は肩の張ったものである。8は板碑である。硬質砂岩の自然石の一部を加工して成形した粗製のものである。方に突起を設け平坦に削った正面の上方に「曼」の梵字を刻する。彫りは深くなく精緻なものとは言い難い。大きさは高さ44cm、最大幅22cm、厚さ16.4cmである。9は60号墓正面に伏せて安置されていた切石で、元は地輪であったのかもしれない後述する台座礎石と同様の使用目的で使われたものと考える。図版7の2～7はすべて60号墓の五輪塔の台座である。このうち1から7は、台座を半切し、2・3の台座の礎石として転用したものである。14・15が組合わさりその上に12が乗り、16・17が組合わさりその上に13が来る。12は1辺が44.8cm厚さ11.2cmで横灰色を呈する砂岩で作られている。蓮弁はかなり

摩滅が激しいが、復弁の半花座が1辺に2葉残る。上面に加工痕がのこる粗製のものである。13は1辺が44cm厚さ10.4cmで横灰色を呈する砂岩で作られており、12にはぼけた大きさのものである。これもまた摩滅が激しく、蓮弁はかなり摩滅しているが、12同様の加工が施されている。14~17は礫石として利用されたもので、本来14・16、15・17が同一個体であったが、それを半切し組違いに礫石として使用している。60号墓のあるテラスが、傾斜しているところから、露出する前面を同一の石材で統一使用したものと考える。石材は14・16が灰白色の砂岩、15・17が12・13同様の横灰色を呈する砂岩で作られている。大きさは、14・16が1辺57.6cm 15・17が58cmのもので、摩滅が激しく蓮弁は見られない。

## V 調査の成果の整理

今回の調査で確認された墓は、46基、造墓区画1、円形集石1で、前回1次調査で21基の墓と集石1カ所を検出しておらず、合計で墓67基の墓、3カ所の埋葬に関わる施設を確認した。しかし、時間的制約から今回の調査では墓群全体の検出と実測図の作成に主眼をおいたため、土壌状の土盛りに埋葬された蔵骨器など壊棄した部分が未だに存在し、現時点で全体を整理し報告するには困難な部分が多くある。そこで、1次調査の成果をふまえつつ、今回の調査により得られた成果をまとめることとし、全体の報告は、平成12年に刊行予定の本報告に委ねることにしたい。

### 1. 墓の分類

前回1次調査で墓域を構成する墓の形態について墳丘を持つ物、土壌墓、集石と区分したが、今回の調査で土壌状の高まりに埋葬される例、五輪塔だけを墓標とする例が確実に存在することが明らかとなった。あらためて本墓群を構成する墓の形態をまとめると1.墳丘墓38基（単独に盛り土を持つ物全てをこれにまとめる。）、2.集石墓11基（盛り土を持たず石組みだけの墓）、3.土壌墓2基、4.土壌上墓14基（土壌上に埋葬された墓）、5.塔墓2基（五輪塔などの墓標のみの墓）の5種類に大別できる。これら全ての埋葬後を確認したわけではないが、各墓の代表的なものの埋葬跡から墓の種類とその埋葬年代に違いを見いだすことができそうである。しかしながら、現段階でその作業に移るには不確定な要素が多すぎるため、墓の種類ごとにできる限りの分類を行い今後の調査の指針としたい。

#### 墳丘墓の分類について

1次調査で試みた墳丘墓の分類を再度行ってみたい。分類は前回の基準に準じて次のように分類した。

- A 類 遺体を土坑に単数埋葬したもの
- B 類 火葬骨を小壺の土坑や円形の小穴を掘り、その中に埋葬している。中には、木箱などにいれて埋葬した可能性もある。
- B' 類 火葬骨を複数の土坑に埋葬したもの。埋葬方法はB類と同じである。
- C 類 火葬骨を蔵骨器に入れ、埋葬するもの。（各種の焼き物を含む）
- D 類 火葬骨をその灰とともに墳丘基底面に起き、盛土をして埋葬したもの。火葬跡は検出されない。
- E 類 埋葬や火葬の跡が全く認められない。

また、墳丘の形状の違いから、a. 方形（不整形も含む。）b. 長方形（不整長方形も含む。）c. 円形（椿4円形も含む。）d. その他、不整形でどれにも属し難いもの、あるいは不明のものの4種類に分けることができる。方形と長方形の違いは前回同様、見た目で許容できる範囲、タテとヨコの比率が1:1.5以下もものと規定した。このAからE類とaからdを組み合わせると第1表のようになる。

以上から、1次調査で方形火葬墓で火葬骨をそのまま埋葬する例が多いことを指摘していたが、蔵骨器に埋納する

	A類	B類	B'類	C類	D類	E類	計
a類	4	5	3	11	6		29
b類			1	2			3
c類	1				2		3
d類		1			1	1	3
計	5	6	4	13	9	1	38
葬法	土葬	火葬				不明	

第1表 墳丘墓の形態別比較

例も13カ所あり特筆される。しかしながら、土葬墓はその類例を増やすことはなく、墳丘墓の葬法上の特徴は方形または、長方形の墳丘に火葬されているものが23例で墳丘墓全体の約60%を占め、土葬は13%程度と少ないことが明らかとなった。

#### 集石墓について

今回の調査では、前回みられなかった集石墓が11基検出された。検出状態は、自然石が平面的に並べられただけの様にも見えるが、よく見ると人頭大の石が方形に並べられ、縁石となっている。なかでも21・22号墓と23・24号墓は一对の墓と考えられ双墓であると考えている。大型の方形墳丘墓45・46号墓周辺の52~54・57~59号墓についてもそうした傾向がみられる。

#### 土壘上墓について

土壘上の高まりに集石して築かれた墓を総称して呼ぶが、1次調査の2~2・今回検出した65~67号墓のように周溝や墓道の構築の際に積み上げた盛り土を利用した感のもの以外に、34~41号墓のように集石を取り囲み墳丘を結ぶ意図で構築された墓が検出された。これらは25~31・33号墓、48の円形集石と相まって墓道からみると祭壇のような景観を作り出しており、これらが時代的に連続して計画的に配置された群であることが解る。本墓群の一画期となると考える。

#### 塔墓について

墳丘・石組みを持たず、五輪塔などの石塔のみを墓標とする墓である。確實なのは、56号墓と60号墓である。これらが、造立するのは、墓群の南端部分で、双墓と考える60号墓は、丘陵端を削って作り出されたテラス上である。年代は、14世紀末から15世紀初頭で本墓群の最終段階での造立と考える。

#### 墓道について

墓道は1次調査で復元を試みた結果にはほぼ合致した。墓域西側をたどるもの、南西から中央部に向かうもの、テラス部分に向かうものに大きく分けられる。墓道上にむりやり築かれたよう墓はほとんど見あたらず、おのおのの墓へは他の墓を踏みつけることなく大むねたどり着ける。これは造墓が、丘陵上では百数十年と短期に終焉を迎えることから、墓域に余裕があり、墓道上に築造しなくとも十分なスペースを確保できることによるものと考えるが、造墓した各集団がそれぞれのまとまりを意識していたとも考えられ、被葬者の集団が造墓年代に応じて連絡とこの墓群を形成していく結果ではないかと考える。その意味で本墓群の中で墓道の復元は、本墓群を理解する上で重要な位置を占め今後細部に至る検討が必要と考える。

## 2. 造墓の年代と群構成

ここでこの墓群の造墓年代と墓群構成を現時点で理解しうる点について述べる。1次調査で主軸方向や墓の分布からI～Ⅹの群に分けた。今回の調査結果から墓群全体をもう一度整理し、今後の整理のたたき合としたい。ただし調査日の誤解から1次調査の概報の主軸方向が30度ずれており訂正したい。すべての数値に時計回りに30度加えて考えていただきたい。区分の方法は、前回同様、墓の分布、及び主軸方向から区分する。墓の主軸は基本的に墳丘裾(下端)をとらえて同一方向のものを群とするが、墳墓の方向に対する意識が墳頂上の石組みにいると捉えたものは、この方向で区分した(5・8・9・16号墓及び上原上墓など)。この方法で群を分けると次の通りで、今回新たにⅪ群からXⅣ群を設定した。

I 群 1・8・16・17・20号墓

II 群 2・2・1・2・2・3・4号墓・(3-1号墓)

III 群 5・6・7号墓

IV 群 11・14号墓

V 群 12・13号墓

VI 群 9・10号墓

VII 群 18・19号墓(上塙墓)

VIII 群 21・22・52・53・54・57・58号墓(集石墓)・65・66・67号墓

IX 群 23・24号墓(集石墓)

X 群 25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41号墓・48円形集石

X I 群 44・45・46号墓・47造墓区画・43・64号墓

X II 群 49・50・51・53号墓

X III 群 60・56号墓(五輪塔)

X IV 群 61・62・63号墓

このうちVIII群とIX群は、集石墓のある地形から1群にまとまる可能性がある。

X群は48号円形集石を中心に造墓された感があり、墓の正面を西側に向ける意図が感じられるところから1群にまとめた。

XI群は平面形が、方形で1辺が約10m～5m、墳丘の高さも1m前後の大型の墓で正面は、南もしくは南東で日没の方向を指す。この群は、45号墓から出土した白磁の蔵骨器並びに土師質皿(12世紀後半)から本墓群の最も古い墓を中心にしており、1次調査で地形的にみて最も古い造墓と考えた1号墓を含む1群とともに本墓群の成立期の群と考える。1号墓と45号墓を結ぶ線上は、本墓群の立地する丘陵の主尾根にあたり、このラインが基準となって造墓が進められたと考える。25号墓から29号墓はこの主尾根上に立地し標高も高いが、I・XI群とは造墓に対する観念が、墓の向きや構造に現れており別に区分した。

XII群は、丘陵の縁辺部に築造された方形の墳丘墓で同一軸方向を持つものである。53号墓の遺物から13世紀末から14世紀初頭の群と考える。

XIII群は、丘陵端や墓域西端のテラス上に築かれた五輪塔墓である。五輪塔や出土遺物から14末ないし15世紀の造立で、本墓群の最終段階のものと考える。

XIV群は、墓群西側の墓道脇の1群である。立地・軸方向からVI群と関係するものかもしれない。

全体を概観すると、本墓群はI・XI群の築造が行われる12世紀後半に始まりII・X群などが築かれる14世紀前半まで造墓活動が続いた、ややあって14世紀末あるいは15世紀にXIII群が現れ終焉を迎えたものと考える。

## VII まとめ

以上であるが、保存を前提とした調査のため未だに未調査の部分があり、また分析も終えていない部分が多くある。例えば各墓の年代の決定、双墓（夫婦墓）の分析、出土した埋葬骨の分析、それらをふまえた被葬者の検討などまだ多くの課題が山積している。これらを整理検討する作業の中で、本地域の中世初期の様相が、かなり明確になると思われる。そこで、これまで明確になった点と問題点を列記し、今後の課題を明確にしたい。

1. 造墓年代は、12世紀後半から15世紀に及ぶが、14世紀前半に一度途切れ、西端のテラス部分が作り出される14世紀末から15世紀に五輪塔をもつ造墓がなされ終焉を迎える。
2. 造墓は、1号墓と45号墓を結ぶ木石陵の主尾根に軸線を設け、西側に並ぶ大型の墳丘墓、47分の造墓区画とみられる部分などを計画的に配置している。
3. 墓の形態は、方形・長方形の墳丘墓、円形・楕円形の墳丘墓、平面に集石した集石墓、五輪塔を持つ塔墓、土築墓、の他に、土壘上に集石を置いて埋葬した土壘上墓などがある。
4. 25号墓～41号墓・48号円形集石までのX群とした墓群は、あたかも集団墓の様相を呈し、他に設定した墓群と埋葬觀念が異なるように見受けられる。有力豪族、武士團などいろいろな想像をかき立てるが、非常に特徴的な墓群であり、他の類例を検索する必要がある。
5. 集石墓、塔墓、一部墳丘墓に双墓（夫婦墓？）とみられるものがある。主体部を2カ所もつ6号墓、21・22号墓、23・24号墓、49・50号墓、2基の五輪塔が達成60号墓などがあげられる。夫婦墓は、中世の「家」を中心とする社会の象徴と言わわれているが、本墓群における位置づけをどう考えるかが課題である。
6. 埋葬方法は、火葬、土葬があるが、火葬が全体の約84%を占め、土葬と考えられるものは約13%と圧倒的に火葬が多く、なかでも方形・長方形の墳丘墓に火葬された例が約60%と多く、本墓群の埋葬の特徴となっている。
7. 葬骨器による埋葬が、今までのところ13カ所で確認された。白磁四耳壺1、八尾焼1、珠洲焼11と珠洲焼が体制を占め13世紀代から15世紀代までの壺、瓶、蓋として使用された揃鉢などが出土している。これらの珠洲焼には、類例の見あたらない波紋壺や、他の焼きものと器形が似かよったものがみられ、特徴的である。また、器形の歪んだ物が日々付き、埋葬用として焼かれた特殊な物が含まれている可能性を孕む。他の焼き物との比較が必要なのかもしれない。

以上であるが、12世紀後半から13世紀は古代から中世の転換期とされる。それがどの時点かは意見の分かれるところであろうが、本墓群の成立が12世紀後半であることが判明したことから、本墓群の造墓意識の中にそうした時代背景があるのでないかと考える。本墓群の成立期、方形の大型墳丘墓が次第にその規模を減じる点や、墓の拡張の際に見受けられる同族墓とみられる墓の存在、双墓や集団墓的な墓の存在これらを年代を追って体系的に整理することが本墓群を整理する上の最大の焦点と考えている。未然な検討に終始したが、多くの方々の検討と真摯な批判を乞いたい。

### むすび

本墓群は、次年度以降も測量は継続し、周辺調査も行う予定である。明年度は、黒川村山中に約千年前にあったと言われる旧真興寺の北定地、古寺（ふるいでら）と、上山古墓群東側にある平坦面の調査を計画している。これらの調査を行なう中で順次検討を加え本地域におけるこの墓群の姿を明確にしていきたい。上市町教育委員会では、本墓群の整備と一般への公開を目的として、この調査事業に着手している。調査の最終年度には本報告の刊行も予定しており諸氏のさらなるご協力を願うものである。

第3表 墓丘墓、集石墓、塔墓一览

No.	遺跡名	位 置	面 向	地 形		燒 器 (m)	燒 頭 器 (m)	燒 頭 器 (m)	燒 頭 器 (m)		火 焰 長 度 及 幅 度	火 焰 形 狀	火 焰 方 法	燃 燒 考 察
				土 堆 方 位	平 面 形				長 軸 與 輪 軸 之 角 度	輪 軸 方 位				
33	20号墓	X=791.85 79188 Y=21.975 21.977	N50-W	方	1.36*1.28*0.06		N34-E	石瓶 方形	0.98*0.94	不明			火葬	
24	21号墓	X=791.84 79185 Y=21.972 21.973					N31-E	石瓶 方形	1.00*1.04	不明			火葬	集石墓
25	22号墓	X=791.82 79184 Y=21.973 21.974					N30-W	石瓶 方形	1.10*1.08	不明			火葬	集石墓
26	23号墓	X=791.83 79184 Y=21.977 21.978					N30-W	石瓶 方形	2.58*1.68	小雨			火葬	集石墓
27	24号墓	X=791.81 79182 Y=21.976 21.979					N30-W	石瓶 方形	1.62*1.12	高底面			火葬	氯化物、被熟燒入
28	25号墓	X=791.81 79183 Y=21.980 21.983	N84-E	方	3.00*2.34*0.63	N80-E	4瓶 方形	1.62*1.13	高底面			火葬	氯化物、被熟燒入	
29	26号墓	X=791.80 79181 Y=21.980 21.983	N84-E	方	3.00*2.24*0.47	N80-E	6瓶 方形	1.52*1.44	高底面			火葬	氯化物、被熟燒入	
30	27号墓	X=791.78 79180 Y=21.980 21.983	N84-E	方	2.58*2.40*0.46	N82-E	石瓶 方形	1.78*1.40	高底面			火葬	氯化物、被熟燒入	
31	28号墓	X=791.76 79177 Y=21.981 21.984	N88-E	方	2.74*2.86*0.32	N88-E	石瓶 方形	1.02*1.78	高底面			火葬	氯化物、被熟燒入	
32	29号墓	X=791.73 79175 Y=21.981 21.985	N88-E	方	3.61*2.76*0.23	N87-E	4瓶 方形	1.50*1.50	小雨			火葬	氯化物、被熟燒入	
33	30号墓	X=791.73 79175 Y=21.981 21.985					N12-W	石瓶 方形	1.32*1.50	円形	0.32*0.20*0.28 (生骨)		火葬	八块(藏骨)
34	31号墓	X=791.78 79181 Y=21.984 21.987	N02-W	方	2.88*2.60*0.21	N35-W	石瓶 方形	1.24*1.50	円形			火葬		
35	32号墓	X=791.83 79188 Y=21.984 21.988	N02-W	方	4.90*4.60*0.39	N01-E	石瓶 方形	3.24*3.20	不明			火葬		
36	33号墓	X=791.73 79178 Y=21.984 21.986					N37-W	石瓶 方形	2.14*2.12	不明			火葬	五輪壇地輪
37	34号墓	X=791.73 79178 Y=21.987 21.988					N39-W	石瓶 方形	1.36*1.89	不明			火葬	
38	35号墓	X=791.83 79188 Y=21.989 21.994					N35-W	4瓶 方形	2.00*1.46				火葬	
39	36号墓	X=791.73 79175 Y=21.992 21.993					N39-E	4瓶 方形	1.58*1.32				火葬	珠洲(藏骨)
40	37号墓	X=791.71 79173 Y=21.992 21.994					N74-E	石瓶 方形	1.64*1.36				火葬	
41	38号墓	X=791.69 79171 Y=21.993 21.995					N76-E	4瓶 方形	1.60*1.58				火葬	
42	39号墓	X=791.79 79189 Y=21.992 21.993					N86-E	石瓶 方形	1.30*1.08				火葬	
43	40号墓	X=791.81 79183 Y=21.991 21.992					N94-W	石瓶 方形	1.30*1.08				火葬	
44	41号墓	X=791.84 79183 Y=21.998 21.999					N39-W	石瓶 方形	0.95*0.70	不規			火葬	
45	42号墓	X=791.82 79185 Y=21.987 21.988					N15-W	石 瓶	0.88*0.82	円形	0.28*0.24*0.20 (藏骨)		火葬	集石墓 珠洲(藏骨)

46	43号黑	X=79184 79388 Y=21380 21394	N65-E	方形	4.72*4.14*0.90	N13-W	石墨 方形	2.38*0.82	不明	火葬
47	44号黑	X=79168 79173 Y=21388 21393	N18-W	方形	4.94* 0.45	N10-W	4幅 方形	3.20*0.20	基底面	火葬
48	45号黑	X=79164 79171 Y=21390 21386	N17-W	方形	5.80*5.76*1.10	N15-W	石墨 方形	2.80*1.74	基底面	火葬 (底合面)
49	46号黑	X=79165 79169 Y=21376 21380	N12-W	方形	4.08*3.86*0.93	N13-W	石墨 方形	1.38*1.12	基底面	火葬
50	47号黑	X=79169 79177 Y=21375 21386	N15-W	方形	7.91*5.58*0.78	N06-W	6.54*4.52	5.50*2.12	5.0号扁石 刃形素石	基底面
51	48号黑	X=79177 79180 Y=21389 21391	N10-E	菱方形	7.49*5.58*0.78	N06-W	6.54*4.52	5.50*2.12	5.0号扁石 刃形素石	基底面
52	49号黑	X=79171 79173 Y=21387 21389	N80-E	菱方形	7.42*5.20*0.31	N85-E	石墨 方形	1.12*1.10	不明	火葬
53	50号黑	X=79169 79171 Y=21387 21390	N80-E	菱方形	7.42*5.20*0.31	N86-E	石墨 方形	1.04*1.00	不明	火葬 49号黑与灰器
54	51号黑	X=79164 79167 Y=21390 21393	N04-W	方形	3.00*2.46*0.45	N05-W	石墨 方形	1.62*1.54	不明	火葬
55	52号黑	X=79166 79168 Y=21387 21388	N17-W	方形	4.72*4.14*0.90	N47-W	石墨 方形	1.61*1.25*	不明	火葬
56	53号黑	X=79162 79164 Y=21383 21384	N10-E	石墨	1.54*1.25*	石墨	1.54*1.25*	不明	火葬	
57	54号黑	X=79163 79165 Y=21380 21382	N39-E	石墨	2.26*1.58*	石墨	2.26*1.58*	不明	火葬	
58	55号黑	X=79161 79159 Y=21381 21383	N01-E	方形	2.12*1.80*	石墨	0.34*0.38*0.30	火葬 (底合面)	珠酒(碳骨器) 一鼎残片(动物壳?)	
59	56号黑	X=79163 79164 Y=21387 21387	N35-E	石墨	0.28*0.36*	石墨	0.28*0.36*	不明	火葬	
60	57号黑	X=79165 79167 Y=21384 21375	N48-E	石墨	1.02*1.00*	石墨	1.02*1.00*	不明	火葬	
61	58号黑	X=79166 79167 Y=21373 21374	N43-E	石墨 方形	0.92*0.86*	石墨	0.92*0.86*	不明	火葬	
62	59号黑	X=79168 79169 Y=21372 21373	N78-E	石墨 方形	0.90*0.68*	石墨	0.90*0.68*	不明	火葬	
63	60号黑	X=79169 79163 Y=21380 21386	N14-W	石墨 方形	3.34*2.78*	石墨	2.50*1.38*0.50	五瓣嘴合盖2.5cm (底合面1.4cm)	珠酒(碳骨器)	
64	61号黑	X=79194 79196 Y=21396 21399	N87-E	方形	3.26*3.04*0.68	N89-E	堵塞(底合面)	1.80*1.56*	小罐	火葬
65	62号黑	X=79192 79194 Y=21396 21399	N79-E	方形	3.32*2.64*0.30	N81-E	石墨 方形	1.68*1.20	小明	火葬
66	63号黑	X=79186 79191 Y=21398 21400	N70-E	方形	4.74*4.68*1.17	N66-E	石墨 方形	2.58*1.84	不明	火葬
67	64号黑	X=79180 79184 Y=21400 21403	N85-E	方形	3.74*3.28*0.58	N89-E	方形	1.72*1.58	不明	火葬
68	65号黑	X=79175 79176 Y=21402 21403	L型	石墨	N36-E	石墨 长方形	1.65*1.17*	不明	火葬	火葬
69	66号黑	X=79174 79175 Y=21404 21405	土壤	土壤	N37-E	石墨 方形	1.52*1.04*	不明	火葬	火葬
70	67号黑	X=79173 79174 Y=21406 21407	土壤	土壤	N34-E	石墨 方形	1.10*1.05*	不明	火葬	火葬

## 引用・参考文献

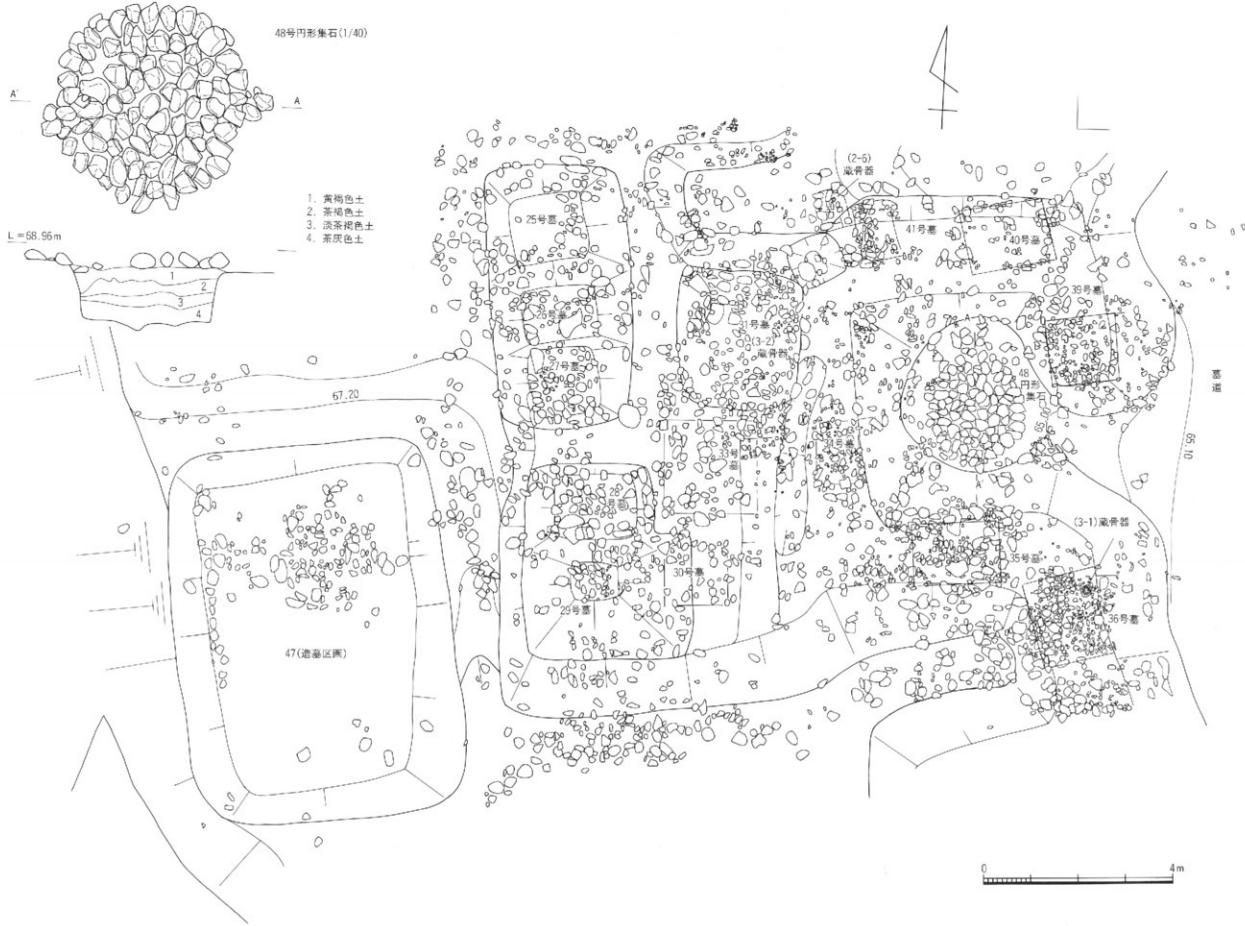
- イ 石井 進・萩原三雄 編 1991帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集『中世社会と墳墓－考古学と中世史研究』名著出版
- 磐田市教育委員会 1993『一の谷中世墳墓群遺跡』
- カ 『角川日本地名大辞典16富山県』1980角川書店
- 上市町教育委員会 1995 『黒川上山古墓群発掘調査概報』
- キ 京山良志 1972「寺跡・経塚・磨崖仏・建物跡など」『富山県史考古編』富山県
- 岸本雅敏 1979『錢堀山遺跡の調査－芦波町清玄寺所在中世墳墓発掘調査概報一』富山県教育委員会
- ク 楠瀬 勝・久保尚文・木本秀樹・大山喬平 1984「第1章鎌倉時代の越中第2節莊園の様相」『富山県史通史編Ⅰ中世』富山県
- サ 坂詰秀一・森 郁夫編 1986『日本歴史考古学を学ぶ 中』有斐閣
- シ 静岡県考古学会 1997 シンポジウム 1996年度『静岡県における中世墓』資料
- タ 清上秀明 1989『辰口町湯屋チョウズカ遺跡』辰口町教育委員会
- ト 鳥取県東伯郡大栄町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室 1985『妻波古墓』奈良大学文学部考古学研究室調査報告書第11集
- ナ 中川成夫 1959『越後華報寺中世墓群の調査』『立教大学文学部史学科調査報告4』  
中野豈任 1988『忘れられた塚場』平凡社  
奈良県立橿原考古学研究所1987 奈良県文化財調査報告書第51集『広瀬地蔵山墓地跡』
- 二 西井龍儀ほか 1993『医王は語る一医王山文化調査報告一』福光町・医王山文化調査委員会
- 八 棚原町教育委員会 1978『奈良県宇陀郡大王山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- フ 藤田富士七 1984『10杉谷群集墳』『富山市吳羽山丘陵古墳分布調査報告書』富山市教育委員会  
藤井正雄 1988『墓地墓石大辞典』雄山閣
- ホ 北陸中世土器研究会 1992『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会資料  
北陸中世土器研究会 1994『中世北陸の寺院と墓地』第7回北陸中世土器研究会資料
- マ 堀文化財研究会 1983『古代・中世の墳墓について』第13回埋蔵文化財研究会資料
- ミ 三浦純夫 1986『第4章考察墓地の再評価をめぐって』『越崎遺跡』石川県堺文化財センター
- ヨ 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館  
吉岡康暢 1989『日本海域の土器・陶磁【中世編】－人類史叢書10－』六興出版
- 四柳嘉章 1987『西川島・能登における中世村落の発掘調査一』穴木町



第3図 墓群全図 (1/200)



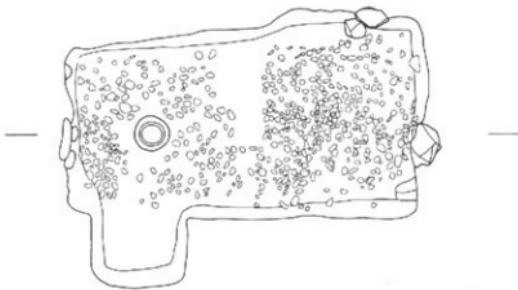
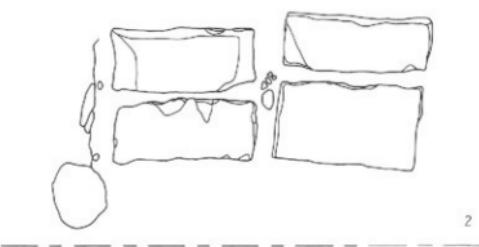
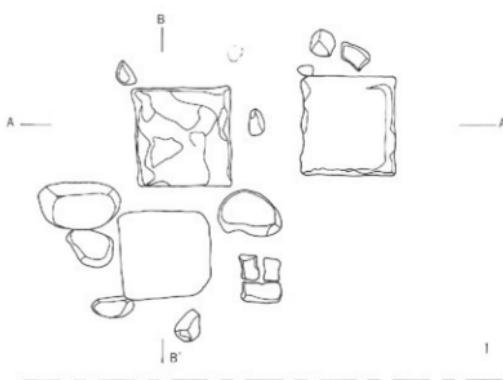
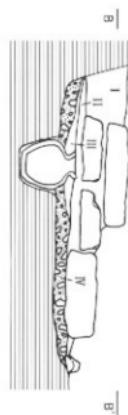
第4図 遺構実測図 (1/80) 20-24・32・43号墓 (10~12は1次調査)



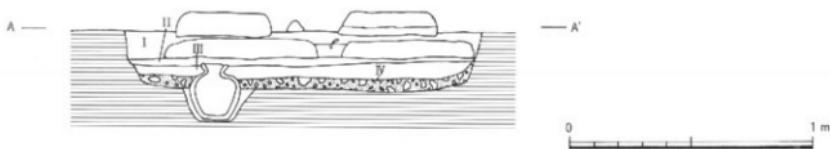
第5図 遺構実測図 (1/80) 25~31・33~36・39~42号墓及び47・48(円形集石)



第6図 造構実側図 (1/80) 37・38, 44~47, 49~50号墓及び南側テラス ~60

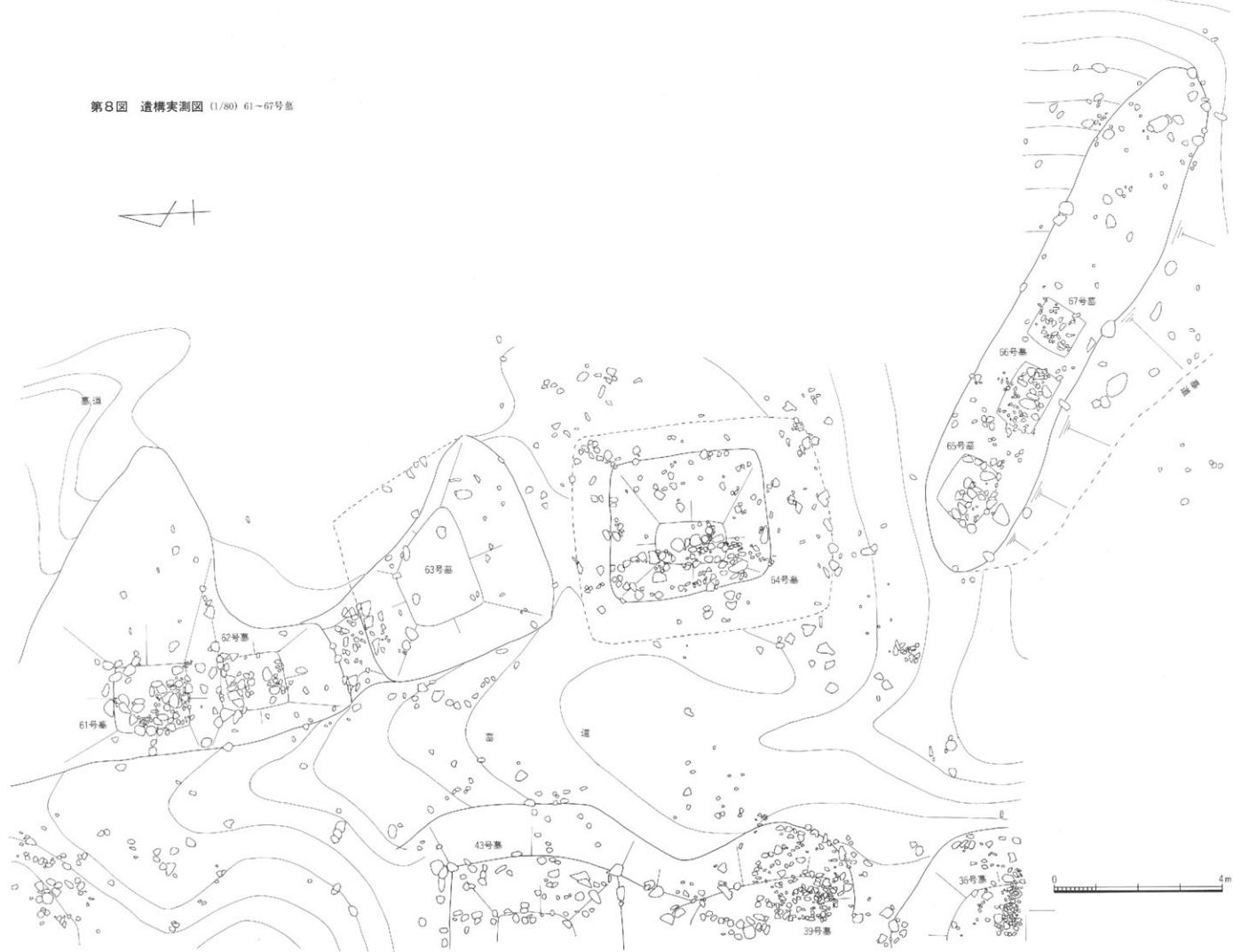


- I 黄褐色土
- II 黄灰色土
- III 砂层
- IV 砂砾层



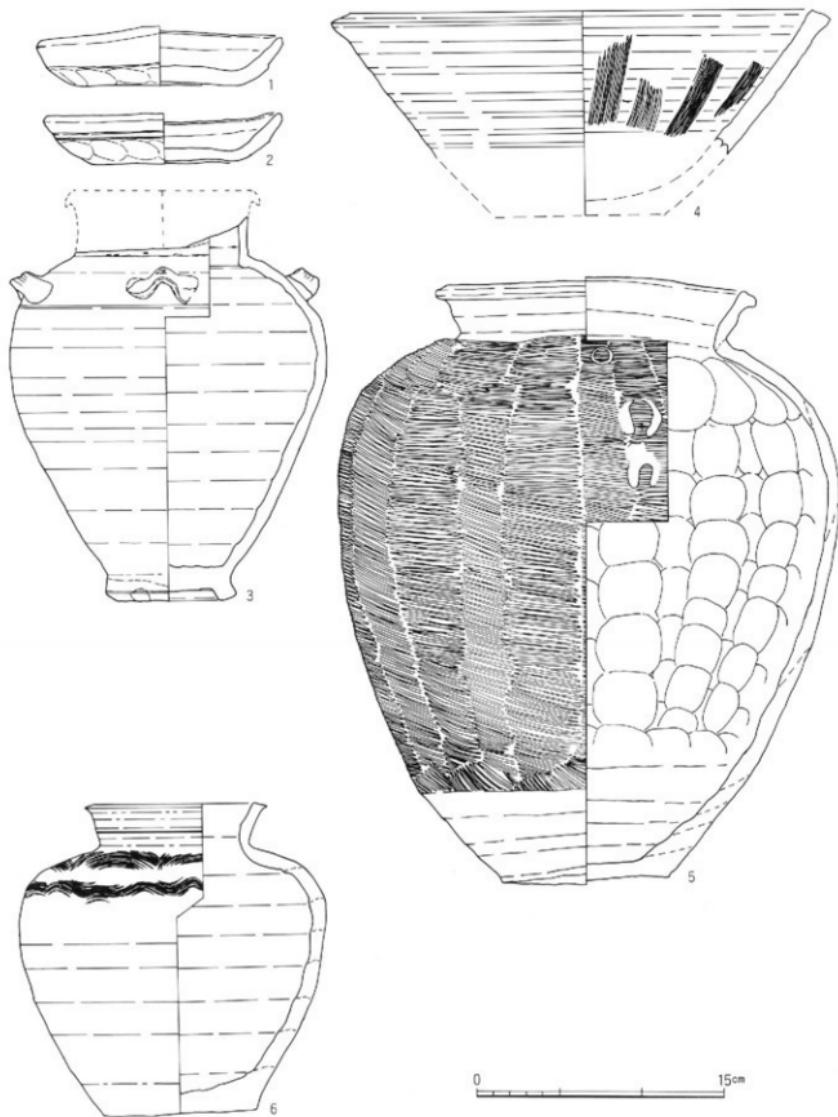
第7図 60号墓五輪塔下埋葬構造実測図 (1/20) 1. 檐出面, 2. 上面古座除去, 3. 墓底面

第8図 遺構実測図 (1/80) 61~67号墓





図版1 黒川上山古墓群周辺航空写真 (約1/6,000)

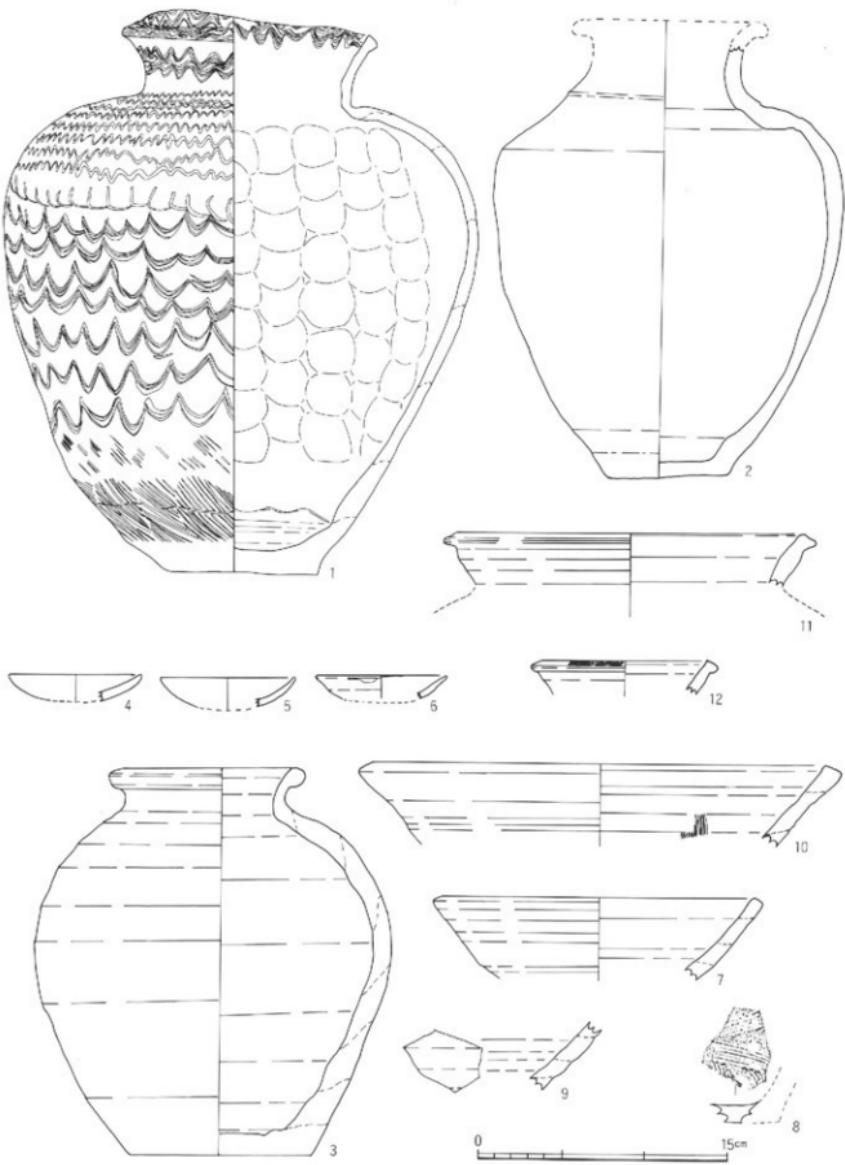


図版2 遺物実測図 (縮尺1/3)

土師質粗 1・2：45号墓出土

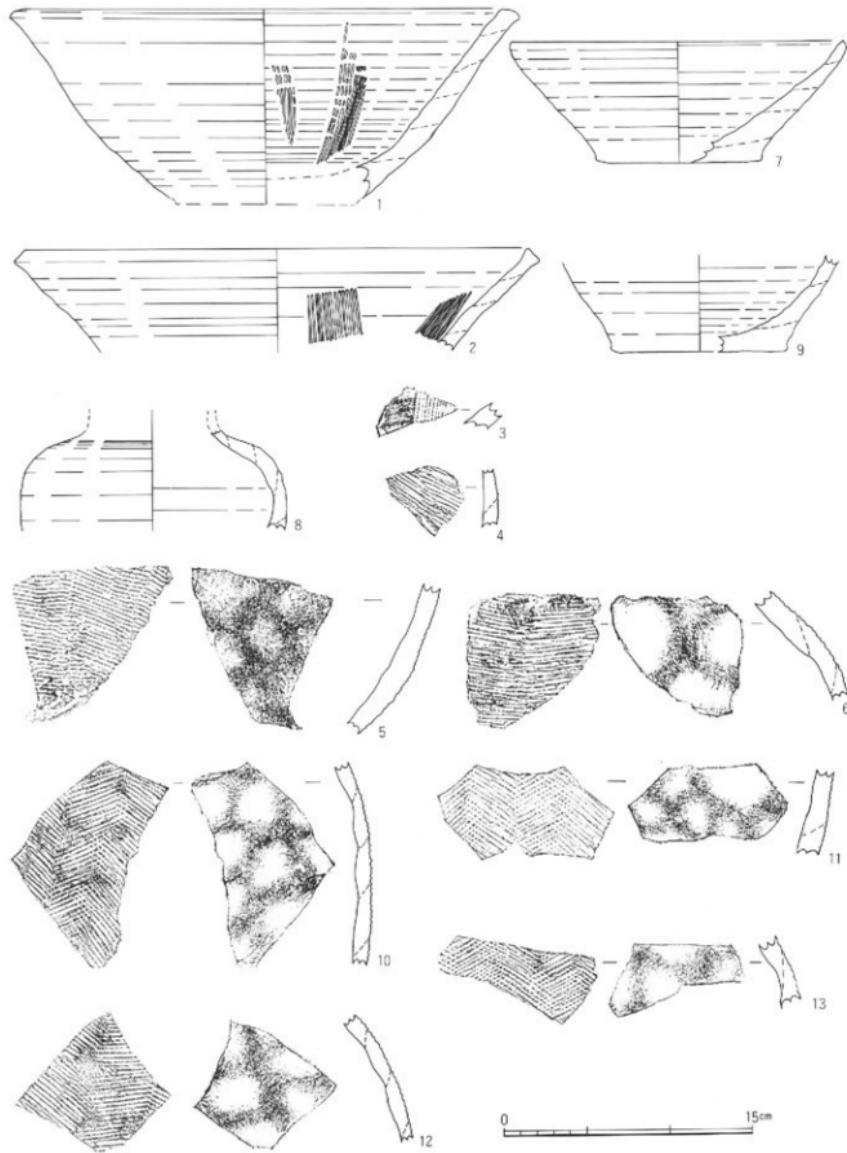
白磁

珠淵焼 4・5：55号墓出土 (図版17参照)



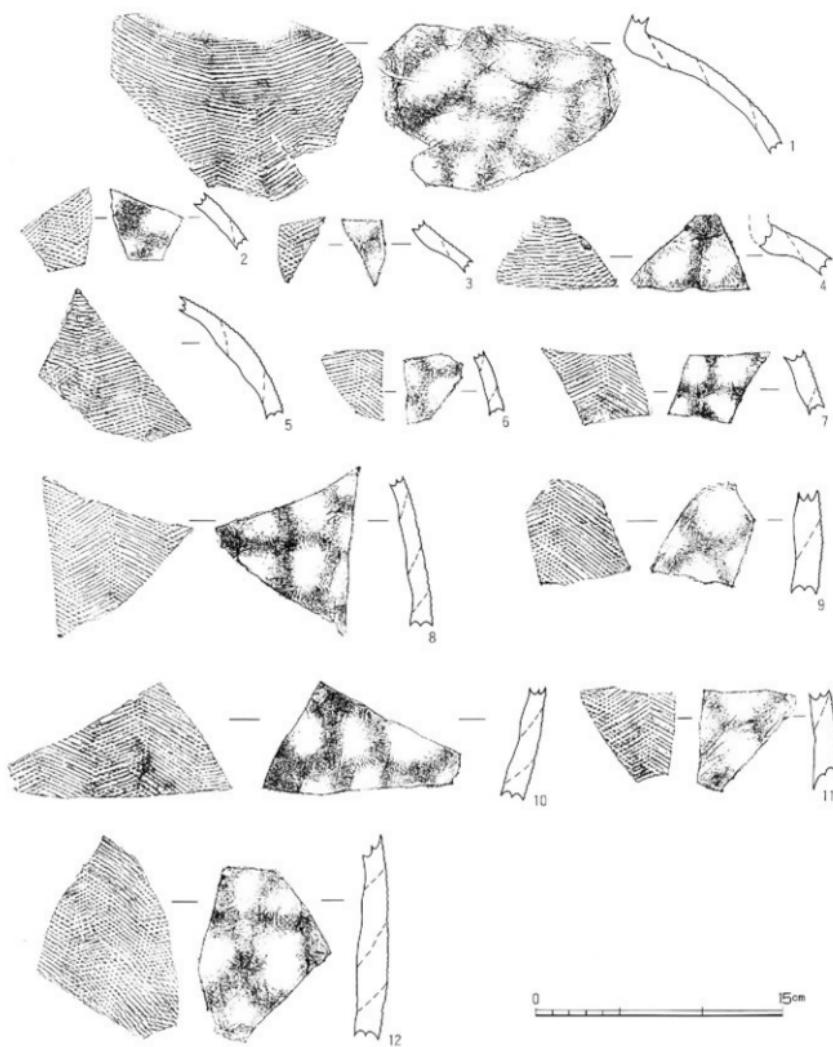
図版3 遺物実測図 (縮尺1/3)

珠洲焼 1：53号墓, 3：60号墓出土, 11・12：34号墓周辺, 7・8：44号墓, 9・10：55号墓  
 八尾焼 2：31号墓出土  
 土師質皿 4～6：60号墓出土 (図版17・18・20参照)



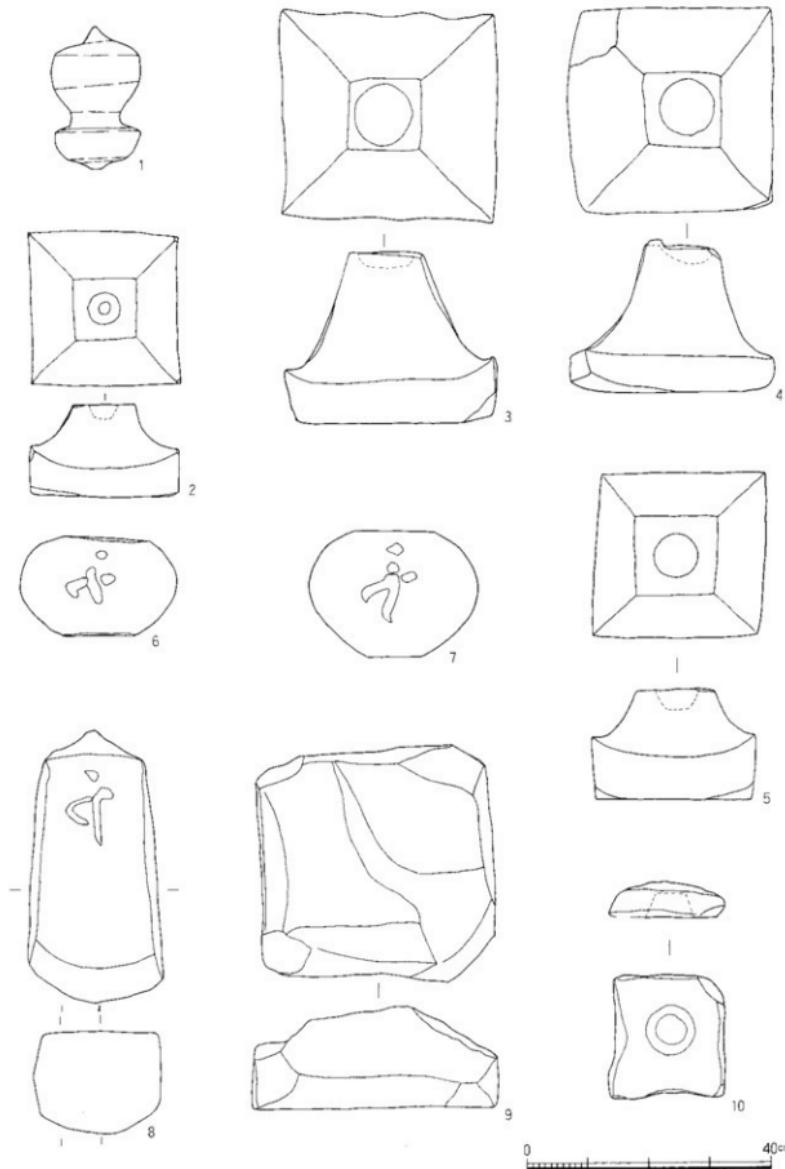
図版4 遺物実測図 (縮尺1/3)

珠陶碗 1:67号墓 2~6:54号墓, 7~9:44号墓, 10・11:37号墓, 12:53号墓, 13:33号墓 (図版30・21参照)



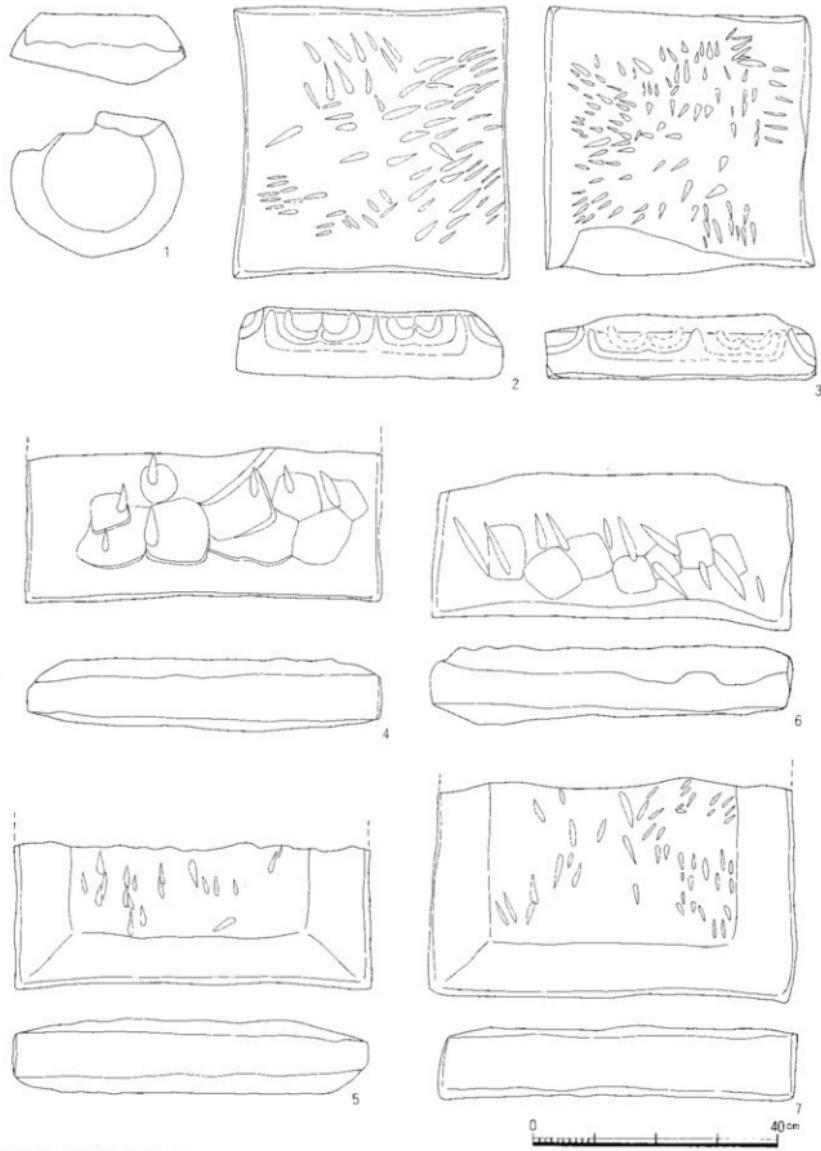
図版5 遺物実測図 (縮尺1/3)

珠洲焼 1~6・10~12:34号墓周辺, 7・9:41号墓周辺, 8:48号墓(図版21参照)



図版6 遺物実測図 (縮尺1/8)

五輪塔 1～7・9・10：南側テラス  
板碑 8：南側テラス (図版18・19参照)



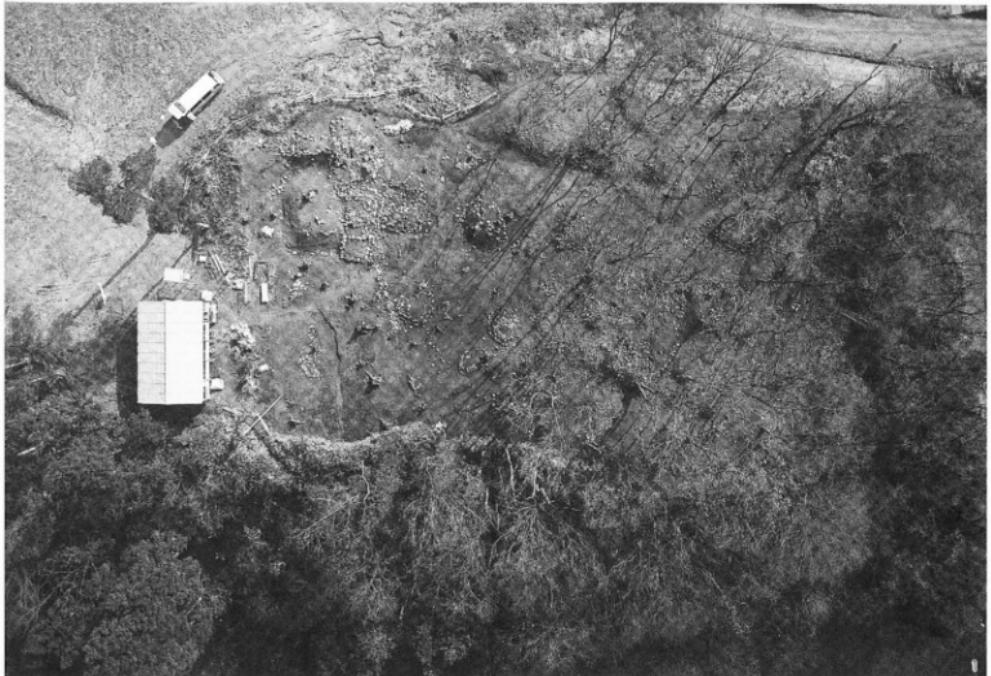
図版7 遺物実測図 (縮尺1/8)

五輪塔 1：両側テラス

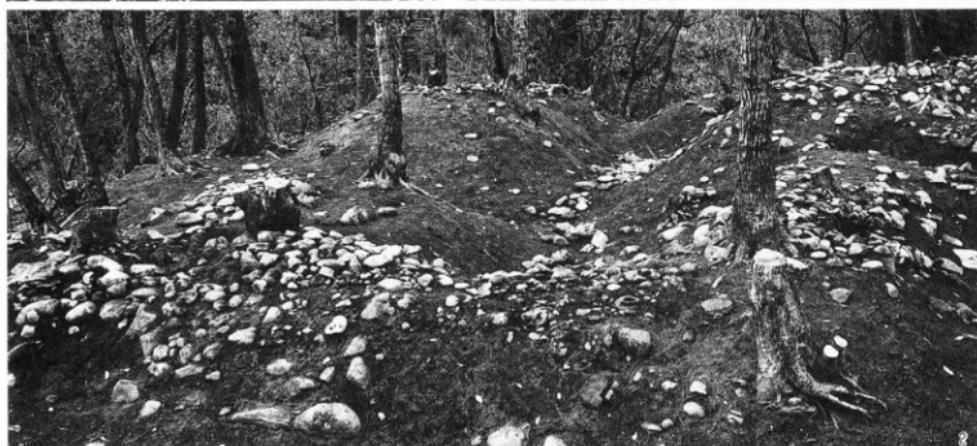
五輪塔古座 2～7：60号墓 (図版18・19参照)



図版8 1.遺跡遠景(南より), 2.遺跡全景(北より)



図版9 1.遺構全景(上空より), 2.25~36号墓・39~42号墓及び48(円形集石東より)



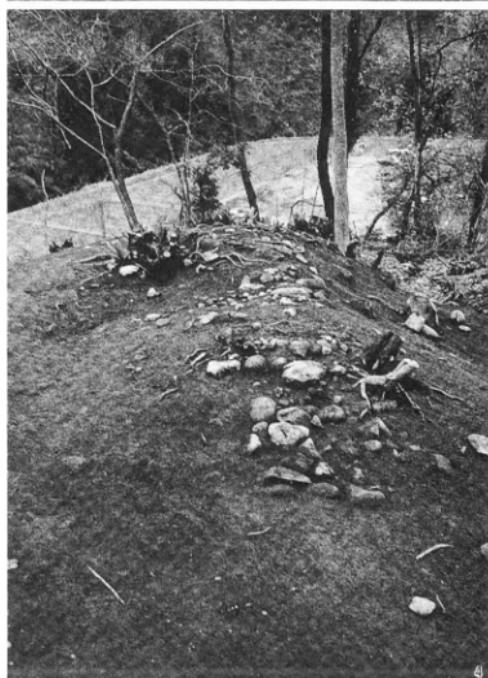
図版10 1.25~31・34・44~46号墓(北より), 2.29・30・35~38・44~46号墓(東より)  
3.61~64号墓(北西より)



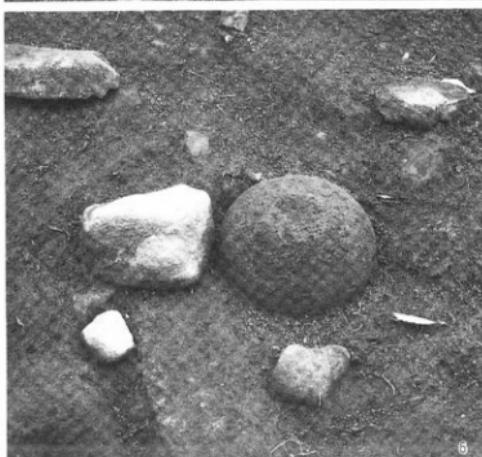
図版11 1.44～46号墓(東より), 2.44号墓(西より), 3.45号墓(北西より), 4.45号墓藏骨器出土状況  
5.46号墓(西より)



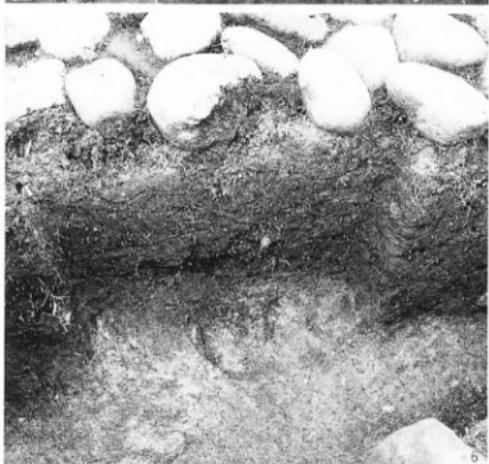
図版12 1.47号造墓区画(北より), 2.51号墓(東より), 3.53・54号墓(南東より), 4.56号墓五輪塔(北西より)  
5.55号墓藏骨器出土状況, 6.23・24号墓(北より)



図版13 1.テラス西側五輪塔出土状況, 2.南側テラス全景(西より), 3.墓道入口より, 4.65~67号墓



図版14 1.60号墓五輪塔台座出土状況, 2.60号墓台座下, 3.60号墓藏骨器出土状況  
4~5.石造物出土状況(南側テラス)



図版15 1.61・62号墓(東より), 2.63号墓(南東より), 3.64号墓(西より), 4.43号墓(北西より)  
5.48号円形集石(東より), 6.48号円形集石断面(東より)